

1960年代後半からドイツ再統一までのDDRにおける 生物教授プランの変遷と性教育

池谷 壽夫

目次

- はじめに——本論文の課題と構成
- 第1節 1968年生物教授プランと教科書
- 第2節 80年代の生物教授プランをめぐる議論
- 第3節 1987年教授プラン案とそれをめぐる議論
- 第4節 1989年生物教授プランの特徴と問題点
- 第5節 89年教科書の特徴と問題点
- おわりに——まとめにかえて

キーワード：生物教授プラン，生物教科書，性教育

はじめに——本論文の課題と構成

本論文では、1960年代後半からドイツ再統一の1990年までのドイツ民主共和国（以下、DDR）の生物教授プランと生物の教科書の変遷を追うなかで、DDRにおける性教育の問題点と課題を解明する。まず、60年代の性教育をめぐる性教育学者の取り組みの1つの成果として、1968年の生物教授プランとそれにもとづいた生物教科書を検討する（第1節）。次いで、70年代の停滞期を経て80年代に入って生物教授プランをめぐる行われた『学校の生物（Biologie in der Schule）』（以下BioS）での論争とその成果としての1987年教授プラン案を取り上げる（第2節と第3節）。そして87年の教授プランをめぐる議論の末に出された89年生物教授プランと生物の教科書を検討し（第4節と第5節）、最後にDDRの生物教授プランにおける性教育の到達点を確認する¹。

第1節 1968年生物教授プランと教科書

すでに池谷（2011b; 2011c; 2011d）で見たように、1960年代に入ると、ドイツ社会主義統一党（以下、SED）第5回大会でのUlbrichtの性教育重視の報告を後ろ盾にしたGrassel, Bachら性教育関係者の努力もあって、性教育は社会主義人格教育の構成要素の1つとして位置づけられて、実践的にも理論的にも発展していくことになる。例えば、Grassel, Bachらは普通教育総合技術上級学校における性教育プログラムを作成しているし、Baer, Wernerらは生物における性教育プログラム案を提案している（池谷2012c）。こうした成果の確認と総括の場として、60年代には性教育に関する一連の会議が開催され、1966年1月に人民教育省の科学協議会のもとに「性教育学研究協議会（Forschungsgemeinschaft Sexualpädagogik）」が創設される（もっとも人民教育省はDDRの終焉まで性教育に関しては基本的に消極的な態度をとりつづけた）。では、こうした性教育に関する理論と実践の進展の中で、生物の教授プランは60年代にどのように変わったのであろうか。

1. 統一的社會主義教育制度に関する法律と社會主義人格

1965年2月25日に「統一的社會主義教育制度に関する法律」（MONUMENTA PAEDAGOGICA 1969: 569-604, 以下1965年学校法）が制定される。この法律で「社會主義的人格」という概念がこれまでの「社會主義的人間」に変えて登場してくるとともに、それに向けた教育がますます強調され、体系化されていく。その第1条では、「社會主義的人格の陶冶・訓育」を大目標とした教育目標が掲げられている。そこでは第1に、「社會主義的人格」とは「意識的に社会的生活を形成し、自然を変革し、充実した、幸福な、人間の尊厳ある生活を営む全面的かつ調和的に発達した」人間とされ、その陶冶・訓育が目指されている。第2に、社會主義教育は、子ども・青年を、「社會主義社会を形成し、技術革命を達成し、社會主義的民主主義に協力すること」ができるように教育することである。そして第3に、それは、普通教育と専門教育の統一的な教育であるとともに、社會主義道徳を身に付けた性格特徴を形成することを意味している。

さらにそれがいっそう具体化された内容が第5条で示されている。そこでは、具体的な教育目標が4つ掲げられている。すなわち、「社會主義国家を強化し防衛するように、ドイツ民主共和国を愛し社會主義の達成物に誇りを持つように教育」すること、「労働に対する愛情、労働と労働する人間の尊重へと教育」すること、「マルクス・レーニン主義の基礎的知識」を伝達し、「自然・社会・人間の思考の発展法則を認識し、それを適用することを理解し、確固とした社會主義的確信を獲得」すること、「集団の中でおよび集団を通じて、意識的な国家公民的・道徳的な行動へと教育」すること、そして、「友情、礼儀正しさ（Höflichkeit und Zuvorkommenheit）、自分の両親とすべての年長者に対する尊重、ならびに男女間の誠実で清潔な関係が社會主義的人格の性格特性であると理解すること」を学ぶこと、である。性教育に関して言えば、とりわけ

「男女間の誠実で清潔な関係」が社会主義的人格の性格特性として求められることになる（以上の詳細については、池谷 2011a 参照）。

2. 「教授プランの有効性に関する指令」と 1966 年生物教授プラン

この 1965 年学校法にもとづいて、その目標である「社会主義人格の形成」にいつそう貢献すべく、1965 年 5 月 7 日に「1965 年 9 月 1 日以降の 10 年制総合技術上級学校における教授プランの有効性に関する指令」(Anweisung zur Gültigkeit von Lehrplänen 1965) が出される (Ministerium für Volksbildung 1965, なお Wernecke 1966; Loschan 1966 も参照のこと)。そして 1966 年 9 月 1 日から精度化された教授プランが年次的に導入され実施されていくことになる。この指令ではこう述べられている。「れわれの学校に対する社会の要求は、(……) すべての授業科目にわたって業績達成能力の本質的な向上と、子ども・青少年の社会主義訓育におけるよりよい成果を求めている。この要求に応じると同時に、この新しい教授プランのうちに据えられた陶冶・訓育の水準に近づけるために、1959 年に導入された現行教授プランを精度化することが必要である」(Ministerium für Volksbildung 1965: 107)。こうして精度化された教授プランでは、生徒の知識・能力と社会主義訓育に対する要求がもっと精確に規定されるとともに、いくつかの教材が変更されることになる。

生物の教授プランに関しては、次のことが指摘されている。第 1 に、社会主義農業における総合技術授業でより高次の水準が達成されたことで、9 学年の教授プランにおける教材領域「生物学と農業」をかなり変更することができるようになり、これによって 8 学年と 9 学年の教授プランが軽減できる。第 2 に、近年の生物科学の発展によって 10 学年用の教授プランの変更が必要になっている。この 2 点から、8～10 学年の授業教材に関して、次のような新たな概要が示されている (表 1)。

性教育に関わる部分の変更について見れば、第 1 に、1959 年生物教授プランでは 8 学年で扱われていた教材領域「人間の解剖学と生理学 (I 部)」が削除されて、9 学年にその I 部と II 部がまとめられて扱われ、48 時間が充当されることになる。第 2 に、それと関連して教科書『人間』は、1965 年には生徒に手渡されないことになり、将来は 9 学年でのみ使用されるとされている。

こうした指令を踏まえた上で、新たに出るであろう精度化された生物教授プランまでの暫定的なものとして示されたのが、1966 年の『教科生物用教授プラン 7～10 学年』(⑬: Ministerium für Volksbildung 1966) であろう。この教授プランでは、そのサブタイトルに「1959 年以降行われた義務上の変更を考慮した 1959 年教授プランの重版 (Nachdruck)」と銘打たれているように、性教育の内容は大きく変わってはいない (表 2)。授業教材の配置は指令どおり、8 学年では植物の解剖学と生理学が中心におかれ、「人間の解剖学と生理学」は「土地と有用植物」とともに 9 学年にまとめられている。

また、「人間の解剖学と生理学」の構成と内容を 1959 年のものと比較してみると、8 学年で教

表1 8～10学年の授業教材

| 学 年 | 時間数 |
|----------------------|-----|
| 8 学年 | |
| 1. 植物の解剖学と生理学 (I 部) | 29 |
| 2. 群集としての森 | 22 |
| 3. 植物の解剖学と生理学 (II 部) | 9 |
| 9 学年 | |
| 1. 土地と有用植物 | 12 |
| 2. 人間の解剖学と生理学 | 48 |
| 10 学年 | |
| 生物の発展に関する学説 | |
| 1. 進化論からの諸事実 | 9 |
| 2. 生物の歴史 | 14 |
| 3. 進化論の歴史について | 8 |
| 4. 遺伝学説の基礎 | 10 |
| 5. 系統進化の発展の諸事実 | 7 |
| 6. 植物栽培と動物飼育 | 8 |

Ministerium für Volksbildung 1965: 112-113 より作成

表2 1966年生物教授プラン(9学年)

| 教 材 | 時間数 | 教 材 | 時間数 |
|-----------------|-----|--------------------|-----|
| 1. 土地と有用植物 | 12 | 2.5 人間の生殖器和個人発生的発達 | |
| 2. 人間の解剖学と生理学 | 48 | 2.6 内分泌 | |
| 2.1 人間の器官系の概観 | | 2.7 感覚器官と神経系 | |
| 2.2 支持・運動系 | | 2.7.1 感覚器官 | |
| 2.3 皮膚系 | | 2.7.2 神経系 | |
| 2.4 新陳代謝 | | 2.8 衛生 | |
| 2.4.1 人間の栄養 | | 2.8.1 個人の衛生 | |
| 2.4.2 消化器官 | | 2.8.2 労働衛生 | |
| 2.4.3 呼吸器系 | | 2.8.3 感染症 | |
| 2.4.4 血液・リンパ脈管系 | | 本質と防衛 | |
| 2.4.5 排泄器官 | | 2.8.4 DDRの保健制度 | |

えられたものが9学年に移行しただけで、その構成と内容には変化が見られない(池谷2014・表14, 本論文表3)。

3. 1968年生物教授プランの特徴

その後、精度化された生物の教授プランが、1966年9月1日(5学年)から1971年9月1日(10学年)までに、段階的に学校に導入される。この生物教授プランの性教育に関わる何よりも大きな特徴は、1966年教授プランで教えられていた「人間の解剖学と生理学」が「人間の解剖学、生理学および衛生」として、性教育学者たちの希望通り、ようやく8学年にまとめて下ろされ、教えられることになったことである(⑭: Ministerium für Volksbildung 1968)。もう1つ

表3 66年生物教授プランにおける性教育部分の教材構成

| | |
|--|--|
| <p>2. 人間の解剖学と生理学</p> <p>2.5 人間の生殖器和個人発生的発達 男性生殖器（精巣，輸精管） 女性生殖器（卵巣，卵管，子宮）；月経性病の指摘 青少年期のセクシュアリティ問題の指摘 男性と女性の生殖細胞・胚細胞 受精と最初の卵割期 胎児の発育 人間の個人発生的発達に及ぼす放射線の影響</p> <p>2.8 衛生 この教材領域では，生徒に，個々人，家族および社会にとって衛生が持つ意味が意識化される．先行学年で獲得された知識が利用される．</p> | <p>2.8.1 個人の衛生</p> <p>2.8.2 労働衛生</p> <p>2.8.3 感染症 本質と防衛</p> <p>2.8.4 DDRの保健制度 わが労働者・農民国家における人間に関するケアとモデル的な健康保護が示される． 国家の健康保護： 重要な法律諸規定 感染症と伝染病の発生と蔓延に対する予防措置 市町村の衛生と食物衛生の指摘（7学年の微生物学も参照） 外来・宿泊治療施設（例えば，ドイツ赤十字社，病院，総合病院および農村診療所） 社会保険の課題と意義</p> |
|--|--|

は，教材単元「哺乳動物」（第5学年）で，生殖の枠内で人間の生殖の実態（妊娠，出産）が初めて授業の対象に含められたことである．もっともそこには相変わらず生殖器官が入っていなかった（Tille 1993b: 387）．8学年の生物教授プランは1969年9月1日から学校に導入されている．ではこの生物教授プランはどのようなもので，どのような特徴を持っているであろうか．

(1) 8学年生物の目標と任務

8学年の生物の授業では，人間の生物の構造と生命事象を学ぶことが明記された上で，5～7学年において獲得された知識と能力にもとづいて，以下の基本的な知識と認識を獲得するとしている．

- ・人間の生体は——たいていの生物の生物と同様に——細胞，組織と器官からなる．
- ・すべての生きた細胞は，新陳代謝によって際立っている．
- ・人間の細胞の新陳代謝は，すべての他の生きた細胞のそれと本質的に一致する．
- ・諸器官の機能は，細胞における新陳代謝を保証する．この新陳代謝が器官の機能の前提である．
- ・栄養系，循環系，呼吸系，排泄系および皮膚系は生物との物質交換を媒介する．
- ・感覚系，神経系，運動系，ホルモン系，循環系および皮膚系は，生物における諸事象と生物と環境との関係を調整し規制する．
- ・人間は——多くの動物と同様に——有性生殖をする．
- ・人間の環境との関係は，労働，言語および思考によって際立っている．
- ・人間には，個人的および社会的責任から，衛生上の諸認識にしたがって健康の維持をケアする義務が生じる．

次いで，生徒に獲得させる能力として，以下のものが示されている．

- ・生物の構造と機能の知識から、健康な生活様式のための諸認識を獲得し、根拠づけ応用する〔能力〕
- ・基本的な概念（篇2.7）を定義し、それらの概念をもちいて作業する〔能力〕
- ・生理学的な試験を指導にしたがって行い、評価利用し、実験を記録する〔能力〕
- ・実際の生徒の活動（実験、調査）において集団で作業する〔能力〕
- ・顕微鏡標本を探り出す〔能力〕
- ・生徒用顕微鏡を自分できちんと取り扱う〔能力〕（〔 〕内は筆者の補足）

その上で、8学年における生物の授業の重要な教育任務として、「生徒に、獲得した衛生上の認識、例えば、きちんとした栄養、スポーツの健康促進効果に関する認識を自分の生活の中で意識的に応用することが彼らの個人的な関心と同時に社会的関心のうちにあることを確信させること」が挙げられている。

最後に、授業づくりの注意点として、①生徒が人間の生物を機能的な統一体としてとらえるようにすること、②授業では生徒の知識と経験から出発すること、③授業で獲得する知識が生活実践に対して持つ本質的な関係を生徒に意識化させること、そのために授業教材とより緊密に関連している現実の政治的・経済的諸問題を授業へと組み入れることが、挙げられている（5-8）。

この教授プランでは、先の指令にみられたように、社会主義農業の一定の達成の下で、農業との関連が薄められているし、総合技術陶冶・訓育との関連も指摘されているものの、以前ほど強調されているわけではない。

（2）8学年生物教授プランの構成とその性教育内容

次に、8学年生物教授プランの構成を、1959年と1966年のものと比較してみる（池谷2014・表15、本論文の表2～4）。性教育部分に関して言えば、まず第1に、「人間の解剖学と生理学」がこれまで、1959年教授プランでは8、9学年にまたがり教えられることになっていたのが、1966年には9学年にまとめられ、さらに1968年教授プランでは8学年に下ろされ、「人間の解剖学、生理学および衛生」という変更されたタイトルのもとで集中的に教えられることになっている。第2に、「人間の解剖学と生理学」の性教育部分に関する項目がこれまでは「人間の生殖器官と個人発生的発達」というタイトルであったが、それが「生殖と発達」に変更されている。

しかもその性教育関連の内容を比較しても（表3・表5）、その内容は66年と比べてもいっそう充実したものになっている。第1のもっとも大きな違いは、これまでも問題とされていた出産がようやく取り上げられ、それとの関連で新生児、母子の健康保護が扱われていることである。ただし、ここでは社会主義道徳との関連で性倫理的な側面が強調されているのが特徴的である。

また、59年と66年教授プランでは「青少年期のセクシュアリティの指摘」とだけあって、その内容はあいまいであった。しかし、68年教授プランでは「青少年期をとくに考慮しての産後の発達」が独立し、そこで人間の発達段階と青少年の性的成熟が取り上げられ、身体的成熟と社会的成熟や胎児に対する親の責任が挙げられている。しかも青少年期のセクシュアリティ問題を

表4 1968年8学年生物教授プラン

| | |
|--|--|
| <p>人間の解剖学, 生理学および衛生</p> <p>1. 導入</p> <p>1.1 健康と業績達成能力にとっての衛生の意義および現代衛生の前提としての生物学の基本知識</p> <p>1.2 生物界における人間の地位</p> <p>1.3 人間生物の構造と生命事象の概観</p> <p>2. 物質・エネルギー代謝</p> <p>2.1 新陳代謝への導入</p> <p>2.2 栄養と消化</p> <p>2.2.1 栄養 2.2.2 消化管の構造と機能 2.2.3 正しい栄養と消化系の衛生</p> <p>2.3 血液とリンパ</p> <p>2.3.1 血管とリンパ系 2.3.2 血液とリンパの輸送・保護・防衛機能 2.3.3 応急処置と循環器の衛生</p> <p>2.4 呼吸</p> <p>2.4.1 呼吸器の概観 2.4.2 肺における呼吸運動とガス交換 2.4.3 呼吸器の衛生</p> <p>2.5 細胞の物質・エネルギー代謝</p> <p>2.6 排泄</p> <p>2.7 物質・エネルギー代謝についての復習と体系化</p> <p>3. 皮膚</p> <p>3.1 皮膚の構造と機能</p> <p>3.2 皮膚の衛生</p> | <p>4. 運動と姿勢・身体維持</p> <p>4.1 運動・支持器官とそれらの機能</p> <p>4.1.1 骨-筋肉系の意義 4.1.2 運動事象の基礎としての収縮要素 4.1.3 骨格の一般的概観 4.1.4 筋肉組織と骨格との協力 4.1.5 諸器官の協力</p> <p>4.2 支持・運動系の衛生</p> <p>4.3 支持・運動系の損傷—応急処置</p> <p>5. 感覚・神経機能</p> <p>5.1 感覚器官と神経系の協力への導入</p> <p>5.2 感覚機能</p> <p>5.3 神経機能</p> <p>5.4 感覚器官と神経系の衛生</p> <p>6. ホルモン</p> <p>6.1 ホルモン調整の基礎</p> <p>6.2 血糖レベルの調整</p> <p>7. 生殖と発達 (個人の発達)</p> <p>7.1 生殖—生物の基本的性質</p> <p>7.2 生殖器官の構造と機能</p> <p>7.2.1 女性の性 7.2.2 男性の性</p> <p>7.3 胎児の発育</p> <p>7.3.1 受精と胚 (胎児) の発育 7.3.2 出産</p> <p>7.4 青少年期をとくに考慮しての産後の発達</p> <p>8. 衛生についての復習と体系化</p> |
|--|--|

オープンに議論することが求められている。これが第2の大きな違いである。

第3の変化は、衛生も一般的な衛生の説明ではなくて、生殖との関わりで論じられていることである。そこでは女性生殖器のガンもはじめて取り上げられている。

第4に、1966年教授プランでの「受精と最初の卵割期」と「胎児の発育」が「胎児の発育」にまとめられるだけでなく、その内容も詳細なものとなっている。とりわけ、出産や授乳におけるホルモンの働きが取り上げられている。最後に、「射精」がはじめて取り上げられたことも、大きな変化であろう。

教授プランの解説書である Autorenkollektiv (1973: 209) によれば、教材領域「人間の解剖学, 生理学および衛生」が8学年の教授プランへと早められることで、この学年段階での生物の授業が、この年齢段階における若者の心身の成熟の要求にもっと適うようになった。これは先にみたように前進であった。しかし、68年教授プランをめぐっては、不思議なことに、BioS誌上ではまったくといってよいほど討議がなされず、意見表明しか行われなかった (Tille 1993a: 269)。これまで問題にしてきた性教育上の問題が一定程度採り入れられ、前進したからであろうか。教授プランの改訂のたびに、BioS誌上では活発な論議がなされていたことから考えると、不思議だと言わざるを得ない。

表5 68年教授プランの性教育内容

| | |
|---|---|
| <p>7. 生殖と発達（個人の発達） 本授業は、先行した学年で獲得された、成長・発達・生殖に関する生徒の知識から出発する。／生徒は成長と発達（個人の発達）を区別し、人間の重要な発達段階を知り簡単に特徴づける。男女とその特殊性は人間の身体的成熟との関連で見られる。胎児の発育を取り扱う際には、何よりも胎児と母親との関係が考慮される。／妊娠と出産に関する授業は、社会主義道徳の意向に沿って生徒の行動に影響を及ぼすことには全く特別に適しており、したがって性倫理教育のために利用される。青少年が彼らの発達のこの段階での心身の変化を認識するのを援助するためには、青少年期におけるセクシュアリティの問題がオープンに議論されねばならない。／生徒は、社会における女性の地位と、国家と社会が子どもにも与えるケアが社会秩序によることを認識する。</p> <p>7.1 生殖—生物の基本的性質 成長—細胞の増加と細胞物質（Zellsubstanz）の増加 発達—細胞の増加と変化と結びついた、生物の不可逆的な方向づけられた変化であり、卵細胞の受精で始まり、死で終わる。 生殖—胚細胞からの新たな世代の発生による種の維持 人間の生殖—卵細胞と精子の合体（受精）、受精卵の形成（受精卵の新たな個人への発達）</p> <p>7.2 生殖器官の構造と機能 7.2.1 女性の性 卵巣—卵胞の成熟（Follikelreifung）、排卵 卵管—卵子の旅 子宮（Uterus）—黄体の形成、卵子の死滅の際の黄体の退化、月経 ホルモンによる卵巣と子宮の機能的な協力、脳下垂体腺による上位のコントロール</p> <p>7.2.2 男性の性 精巣—精子の成熟 精細管—精子の貯蔵 尿道を通じての精液（精子、精巣上体・精囊・前立腺の分泌物）の射精</p> <p>7.3 胎児の発育 7.3.1 受精と胚（胎児）の発育 卵管における卵子の受精、分割の開始、子宮内膜での胚の着床、さらなる卵胞の成長のホルモンによる抑制、妊娠</p> | <p>卵膜への胎児の包含 羊水による胎児の保護 胎盤と臍帯の形成と機能（母親の新陳代謝と結びついた胎児の新陳代謝） 胎児のその後の発育（3か月で—内器官と外形との優先的な区別化；次の数か月で一優先的な成長と身長伸び；7か月からの自立的な生命能力）</p> <p>7.3.2 出産 自立して生きることのできる胎児の母親からの分離（子宮口切開、娩出、後産） 出産のホルモン操作 ホルモンの働きにより乳腺が機能できること（乳の分泌） 臍帯の切断、血中の二酸化炭素過剰によって新生児の最初の呼吸運動が引き起こされること 新生児（乳児・乳飲み子 Säugling）の吸飲反射 母子の健康保護・保健 わが社会主義国家の措置と施設による妊婦の世話—母子保護法</p> <p>7.4 青少年期をとくに考慮しての産後の発達 人間の発達段階の区別：産前の発育、乳児期、幼児期、学童期、青少年期、成人期および老年期 12～18歳の間の成熟の発達：女子と男子での成熟発達の開始、期間および終結の違い；成熟発達の経過での個人的な違い 性的成熟の徴候：成熟した卵子の形成、月経の開始；乳腺の成長、体毛の変化 成熟した精子の形成、精液の射精；声変わり、体毛の変化 人間の生殖の前提：身体的成熟、社会的成熟および責任 身ごもった子どもに対する親の責任 生殖の衛生 生殖器の感染症（性病）—身ごもった子を損傷する特別な危険；感染した際の申告義務 女性生殖器のガンの病気—早期診断の意義（予防検診） 乳児死亡率の現況—国際的および歴史的比較；わが社会主義保健制度の効果</p> <p>8. 衛生についての復習と体系化</p> |
|---|---|

4. 生物の8学年用教科書の特徴

では68年教授プランにもとづいて作成された生物の8学年用教科書(Baer 1970)は、これまでの教科書『人間学』や『人間』とどう違っており、どう変わったのであろうか。

まず全体的な構成と項目を見ると(表6),『人間』では、ホルモン系、神経系の後で「人間の生殖」が扱われている。その内容は、大きく「人間の生殖細胞」と「人間の発達」から構成されている。これに対して1970年の生物の教科書では、ホルモンの説明の後で、「人間の生殖と個人の発達」が取り上げられ、「生殖器の構造と機能」「生殖器の衛生」「胎児の発育」「産後の発達」が扱われている。

第2に、『人間学』も『人間』も、解剖学的な生殖器の図は示されているのに、生殖器が外性器も含めては図示されていなかった。これに対して、1970年教科書になると、生殖器と人間の身体部位は描かれている。ただし女性の外性器(ただしこの語は使用してない)については、小陰唇と大陰唇だけが挙げられている。

第3に、性交がはじめて取り上げられている。『人間学』では、受精については、「新たな生命体の発育は、人間にあっては、すべての二つの性で増殖する動植物においてと同様に受精、すなわち、男性の精子と女性の卵子との結合から始まる」(114)とだけ説明され、性交は他の動植物の生殖からの類推に委ねられていた。『人間』でも、受精に関わって性交について触れられていなかった。「すべての高次に発達した生物と同様に、人間もまた受精した卵細胞、つまり精子が入り込んだ卵細胞から発生する」(103)とだけ述べられている。つまり、Baerのいう「花理論ないしは蝶理論」(1962: 41)がまだ支配していたのである。

これに対して1970年教科書になると、まず受精について次のように性的な結合として説明される。「精子は生殖器の結合の際にペニスから膣へと排出される」(124)。さらに性交のもつ人間的・社会的意味が、抑制的にはあるが、述べられている。すなわち、一方では男性と女性との性的結合は、生殖を引き起こす生物学的事象であるばかりか、それはむしろまずもって「男女の間の深い好意、愛の表現」であり、「身体的にかつ社会的に成熟した人間、ひじょうに愛し合う男性と女性は、それゆえまた性的結合への自然な欲求を持っている」ことが肯定されている。しかし他方では、「パートナーと長い個人的な共同関係が存続し、この共同関係が、パートナーをしっかりと自分の将来計画へと組み入れて生涯一緒に居続けようとするまじめな努力において頂点に達するとき始めて性交すること」が求められている(135-136)。つまり、婚前性交は、社会的成熟に達していれば必ずしも否定はされないものの、「生涯一緒に居続けようとするまじめな努力」があってはじめて許されると釘をさしているのである。

第4に、月経や精通がどのように説明されているかを、思春期の性的成熟の取り扱いを含めて見てみると、『人間学』では、ひじょうに詳しく月経の生理学的メカニズムが説明されているが、男性の精通にはまったくふれていない(110)。これに対して、『人間』は、月経についてきわめて短く説明しているだけである。「卵子が受精されておらずに、卵管で死ぬと、粘膜もまた死んで出血のもとで剥がされる。血液は凝固せずに、受精しなかった卵子と死んだ粘膜の残りと一緒に

表6 3つの教科書の項目比較

| | | |
|--|--|--|
| <p>人間学 (1952) 本文 173p (17) 図 138 (13)</p> | <p>人間 (1961) 本文 124p (7) 図 117 (8), 表 4</p> | <p>生物教科書 (1970) 140p (20) 図 18 (写真, 表も含む)</p> |
| <p>A. はじめに I. 解剖学と生理学の任務と意義 II. 諸器官と器官系 B. 人間身体の運動系 I. 支持系 a) 支持組織 1. 結合組織 2. 軟骨組織 3. 骨組織 b) 人間の骨格 c) 骨と関節 の病気と損傷 II. 運動系 a) 筋肉組織の構造と機能 b) 人間の筋肉組織 c) 病気 と損傷 C. 皮膚器官 D. 新陳代謝 I. 栄養 a) 栄養素 b) 消化器官 c) 消化事象 d) 血液とリンパ における栄養素の摂取と身体 におけるその変換 e) 栄養 とエネルギーの必要 f) ヴィ タミン g) 胃腸の病気 II. 呼吸 III. 血液・リンパの循環 a) 血液 b) リンパとリン パ管系 c) 血液循環 d) 血 管・心臓・循環の病気 E. 泌尿生殖器 I. 泌尿器 II. 生殖器 a) 女性生殖器 b) 男性生 殖器 c) 性病 F. 人間の個人発達の発達 I. 受精と胎の初期発達 II. 胚葉の形成以後の胎児の発育 III. 器官の形成 IV. 出産 G. 内分泌 H. 感覚器官と神経系 I. 感覚器官 a) 一般的な感覚生理学 b) 皮膚感覚器官 c) 化学的感 覚の器官 d) 視覚器官-目 e) 耳の感覚器官 II. 神経系 a) 神経組織 b) 一般的な 神経生理学 c) 脊髄 d) 植 物神経系・自律神経系 I. DDR における保健衛生機関</p> | <p>はじめに 人間の身体構造 細胞/組織/器官と器官系統 支持・運動系統 個々の骨の構造/関節/骨格系 統と筋肉 新陳代謝 身体のエネルギー需要 栄養 栄養素/ミネラル素/ヴィタミ ン/食物の調理と保存/嗜好品 消化系統 口での消化経過/嚥下と胃への 輸送/胃での消化経過/腸での 消化経過/正しい栄養のための 規則 呼吸 気道/肺 血液系統 物質の輸送/血液凝固/血液の 防衛機能/造血と血液の分解 循環系統 心臓/血管/リンパ管 排泄 皮膚 皮膚の特殊な形成/皮膚のケア さまざまな器官系統の協力の例 栄養素の摂取と輸送/筋肉の新 陳代謝/温度調節 感覚器官 人間における刺激受容/目/耳 /鼻/舌/皮膚の受容体 調節系統 ホルモン系統 神経系 人間の神経系 人間の生殖 人間の生殖細胞/人間の発達 衛生 伝染病の衛生/個人の衛生/一 般衛生/労働保護と労働衛生/ 社会衛生 人間の起源 付録 応急処置</p> | <p>はじめに 物質・エネルギー代謝 新陳代謝入門/栄養と消化/消 化管の構造と機能/正しい栄養と 消化系の衛生 血液とリンパ液/血管とリンパ 系/血液とリンパ液の機能/循環 器官の衛生と応急処置 呼吸/呼吸器の概観/呼吸運動 とガス交換/呼吸の衛生/呼吸停 止状態の応急処置 細胞の物質・エネルギー代謝/ 細胞の構造/細胞の新陳代謝 排泄/排泄系の構造と機能 物質・エネルギー代謝の復習と 体系化 皮膚 皮膚の構造と機能/外皮/「内 皮」/皮膚の衛生 運動と身体維持 骨格-筋肉系の意味/筋肉運動 /骨格/筋肉組織と骨格の共同作 業/諸器官の共同作業/支持・運 動系の衛生/支持・運動系の損傷 感覚・神経の機能 感覚器官と神経系の共同作業/ 感覚の機能/目の機能と構造/耳 の機能と構造/神経の機能/神経 系の構造/神経系の機能/感覚器 官と神経系の衛生 ホルモン ホルモン調節の基礎/血糖レベ ルの調節 人間の生殖と個人の発達 性器の構造と機能/生殖器の衛 生/胎児の発育/産後の発達 社会主義健康保護における個人衛 生と社会衛生の統一 空気と水の衛生/住宅衛生/健 康の保護と促進のための社会的措 置と施設 質問, 課題と実験 付録 いく人かの重要な科学者 語句の説明 索引</p> |

() 内の数字は性教育にあてられたページ数と図の数である。

に、子宮口を通り抜けて流れ去る（月経）」(103)。また思春期についても、次のように述べられるだけで、性的成熟についても精通についても一言も述べられていない。「およそ11～15歳で生殖器官の発達が始まるが、この発達は新たな一時期、つまり発達期を始め大人期に入ることによって終わる。この時期は何よりもホルモン腺系における完全な切り替えによって特徴づけられている。つまり生殖腺が働き始め、松果体と胸腺がその活動を始め、そして脳下垂体はその活動を切り替える」(107)。

1970年教科書になると、月経については次のように説明される。「卵細胞が受精されないと、それは数時間後に死滅する。卵巣内の黄体もまたなくなる。そのホルモンがなくなると粘膜がこわれる。粘膜は収縮し、その最上層は死んだ卵細胞と沈積した血液と一緒に腔を通して排出される。この事象は月経と呼ばれる。その後新たに何度も卵細胞の成熟と子宮内膜の成長がなされる。2つの月経の規則的な継続は月経サイクルとよばれるが、このサイクルは一般的にはそれぞれ28日の期間になっている。月経サイクルのおよそ中頃に成熟した卵細胞が卵巣から排出される（排卵）。排卵になると体温がわずかに高くなる」(121)。

その上で、女子は皆月経カレンダーを付けて、月経サイクルから逸れたり、その他の月経痛の際には医者に相談しなければならない、と述べられている。また、月経が正常な出来事であるけれども、とくにしんどい身体活動、長距離のバイクの運転あるいは大きな神経の負担は避けることが指摘されている(122)。さらに二次性徴に触れる中で、男子の精通現象について、次のように述べられている(132-133)。ただし、精通や遺精・夢精などの概念は用いられていない。

成熟発達は11歳と18歳の間におこなわれる。性的成熟の開始、期間および終結は男子と女子では異なる。しばしば身体的成熟の開始と経過には大きな個人差がでてくる。

女子では11歳から二次性徴がでてくる。身体の形は皮下脂肪組織によって丸みを帯び、腰・臀部がひろくなり、女性のバストが発育する。同時に、わきの下と生殖器外部に毛が生える。身体的成熟は月経の開始で達成されている。最初の月経は中央ヨーロッパの女子では、11歳と14歳のあいだにはじまる。

男子では、成熟期の身体的変化は骨格の強化とたくましい筋肉形成とに示される。わきの下と生殖器外部に毛がはえることと並んで、ひげがはえてくる。声域の変化は声変わりと呼ばれる。性的成熟は、最初の成熟した精子の形成によって達成されている。性的成熟の開始後、精液が自らの意志によらずにさまざまな間隔で睡眠中に、しばしば生々しい夢のあいだに、ペニスをとおして排出される。

もう1つ、1970年教科書がこれまでの教科書と違うのは、出産過程と産後の発達が詳細に記述されているだけでなく、母子の保護という視点が付け加えられていることである。そこでは、「親には身ごもった子どもに対する高い責任がある」ことが強調されるとともに、DDRのすべての都市と市町村に設置されている妊婦相談所の役割とその意義が述べられている(127)。

また『人間学』でも『人間』でも、これまでの記述からもわかるように、ボーイフレンドやガールフレンドなどの友だち関係（彼氏・彼女関係）もパートナー関係も、家族も扱われていなかった。これに対して、1970年教科書になると、DDRにおける積極的な家族重視政策のもとで（池谷2012a; 2012b）、これらの記述にページが割かれている。まず、友だち関係については、「同性間および男子と女子との間の真の友だち関係」は青少年の発達を促進することができるが、そのためには「相互の尊重と承認」がなければならないことが強調されている（133-134）。しかも、この延長線上で両者とも固定したパートナー関係や家族が展望されている。そこで強調されるのが、身体的成熟とは区別される「精神的・社会的成熟」である。この成熟はおよそ18歳で獲得されるもので、これと身体的成熟があいまってはじめて、家族づくりと親の責任が可能になるとされる（134-135）²。こうして家族は「人間社会の最小単位」として積極的に評価され、促進される。

では、避妊と妊娠中絶は教科書ではどう扱われているであろうか。まず避妊から見ていくと、『人間学』と『人間』はこの問題にはまったく触れていない。1970年教科書になると、「出産調整」という言葉が使われるが、「避妊」という言葉は出てこない。家族計画との関連で次のように「出産調整」の義務と権利が述べられているだけで（136）、この時期には、避妊はそれ自体として扱われず、出産調整と関連づけられてのみ扱われていることがわかる³。

性的結合はみな受精に至ることがあるから、それを予防するには特別な安全対策が必要である。社会主義道徳に関するわれわれの見解によれば、人間は自分の家族における出産調整に対する義務と権利を持つ。自分の精神的能力と意志力との高い発達にもとづいて、人間は、自分の子ども数を社会的および個人的利害と一致させて調整する（家族計画）ことができる。性交する際に新たな生命を作ろうとしないならば、精子と受精可能な卵子との結合を防がねばならない。このことは様々な手段で可能である。わが共和国の全市民は、青少年もまた、性・結婚相談所あるいは医師のところで、彼らに適切な手段とその使用について情報をもらう可能性を持つ。

このように、1970年教科書では、避妊は消極的に扱われ、家族計画との関連でのみとらえられており、また避妊手段の情報についてもまったく説明がなされず、性・結婚相談所に委ねられている。また妊娠中絶の問題は、青少年の間では50年代以来一貫してきわめて重要な性的問題であったが、これらの教科書が妊娠中絶の自由化以前のものであることもあってか（妊娠中絶の自由化は1972年、池谷2009cも参照）、まったく取り上げられていない。

最後に、ホモセクシュアリティの問題は、後に見るように、1989年の教科書に至るまで、DDRの教科書ではまったく取り上げられておらず、男女の異性愛が暗黙の前提とされていた⁴。

5. 生物教授プランと教科書の問題点

こうして、1968年生物教授プランと教科書はいくつもの課題を残すことになった。1つは、今述べたように、避妊や妊娠中絶がきちんと取り扱われていないことである。たしかに、60年代には妊娠中絶の禁止はかなり緩められていた（池谷 2009）。しかし、生物教授プランは妊娠中絶法による妊娠中絶の自由化以前に出されたもので、そうした事態を想定してなかったこともあり、避妊や妊娠中絶については触れずじまいであった。

だが、それだけが理由ではなかった。1970年教科書の編者である Baer 自身、避妊を教えることについては消極的であった。Baer は、北欧諸国、とりわけスウェーデンで行なわれている「性交（Begattungsakt）と避妊」のテーマの取り扱いに触れて、あまり歯切れのよくない表現でこう述べている。「われわれは最後の学年でのこのような教授（性交と避妊の授業——引用者）をまったく適切だと考える。このような教授は行うことができるが、しかし無条件に行われる必要はなく、学年主任によって行われることもあるし、あるいは授業外教育の枠内で医師によって提供されることもある」（Baer 1966: 744）。もっとも、60年代の性教育学者の間では、避妊についてはいつ取り扱うかについては論争があったものの、このテーマを取り上げるべきだという点ではすでに一致がみられた（Grassel 1962: 19；池谷 2011b）。

だが、1965年にピルが解禁され、1972年の中絶法や「妊娠中絶法とそれと結びついた16歳からの女子への避妊薬の可能な支給に関する指令」が出される中で、しかも青少年の性の実態からすると、妊娠中絶に絡んだ問題も授業で取り扱うことが求められるようになった（Grassel/Bach 1974: 586f.）。というも、例えば青少年女子が16歳で排卵抑制剤（ピル）を処方してもらうことができるようになったのに、その作用メカニズムやその可能性と限界については情報を与えられていないという事態が生じることになったからである（ピル問題については、池谷 2012b 参照）。また、72年以降は、ただ妊娠中絶ができることを知るだけでなく、さらにこれと結びついたリスクや妊娠予防法について十分な知識を持つことが求められた。Bach（1978: 97）は次のように述べ、教授プランにはないからといって避妊問題を避けてよいというわけではなく、もっと積極的に妊娠中絶法に対応することを教員に求めている（なお Bach 1975 も参照）。

妊娠中絶法と、それに結びついた、16歳以降の女子への避妊薬の可能な支給に関する指令は、例えば、このテーマを授業でも扱うことを必要としている。新たな教授プランはこれに関してももちろん何も指示することはできなかった。しかし、教員はそれでも青少年にこれらの問題に熟知させることは必要である。さらに、青少年が16歳で排卵抑制剤を処方してもらうことができるのに、教授プランがそれをはっきりと求めていないからといってその作用メカニズム、可能性と限界について情報が与えられていないとすれば、矛盾している。

その上で、Bach は、たんに妊娠中絶が可能だということを教えるだけではなく、「それと結びついたリスクおよびとりわけ予防方法について、十分な知識を獲得すること」（98）が無条件

に必要だと考えている⁵⁾。

もっとも、80年代初頭まで避妊はあくまでも家族計画の手段と見なされていた。「避妊は家族計画の1つの本質的な構成要素である、というのもそれぞれの子どもが真に望まれた子となるように、避妊は望まない妊娠を防ぎ、責任意識のある親性を支えるからである」(Aresin/Müller-Hegemann 1982: 45)。70年代における家族重視の「子だくさん政策」とそれにもとづく性教育の取り組みのもとでは、セクシュアリティの快樂の局面の軽視と相まって、避妊がそれ自体として積極的に扱われることはなかったのである(池谷 2012b)。

第2の課題は、青少年期のセクシュアリティの機能を問題にする際には、生殖だけではない側面、とくに快樂の側面や自慰(マスタベーション)も肯定的に取り扱われねばならないが、それらの問題が取り扱われていないことである。すでに別稿で見たように(池谷 2011d)、60年代には、そして70年代においてもなお、進歩的な性教育者の間でも(GrasselやBachですら)マスタベーション、いわんやホモセクシュアリティもまだ誤った発達としてとらえられていたから、保守的な人民教育省下でつくられた教授プランにそれらが採り上げられなかったのも、無理からぬことではあった。セクシュアリティの快樂的側面が重視されるようになるには、80年代始めまでまたねばならない(池谷 2013a)。

第2節 80年代における生物教授プランをめぐる議論

その後、1968年教授プランは、1976年のSED第9回党大会と1978年の第8回教育会議を経て、1982年にほんの少しだけ改訂される(⑩: Ministerium für Volksbildung 1982)。まず、1968年教授プランにあった「2.5 細胞の新陳・エネルギー代謝」が削除され、それに伴い時間数が若干変化している。また、「7.1 生殖—生物の基本的性質」での「発達」が「個人の発達」に変えられ、「7.4 青少年期をとくに考慮しての産後の発達」のところで、「結婚と家族に対する社会の責任」が新たに付け加えられている。その一方で、避妊と妊娠中絶は取り上げられずじまいであった。妊娠中絶発後10年も経っているにもかかわらず、である(もっとも、後で見るように、1982年の8学年用生物教科書では、避妊も妊娠中絶も扱われている)。

しかし、社会はこの間に大きく変化し始めていた。80年代になると、青少年の若年結婚や妊娠・妊娠中絶問題などは引き続き課題となっはいたが、セクシュアリティも快樂という側面を含めて広くとらえられるようになった。他方では70年代から起こったホモセクシュアル当事者の運動が公共の目にも触れるようになるし、AIDSが世界的に問題にもなってくるなかで、ホモセクシュアリティが良くも悪くも注目されてくるようになる(池谷 2013a; 2013b)。また生物学においては、環境問題や遺伝子学の取り扱いが実践的に問題とされてくる。こうした中で、生物の新たな教授プランを求める動きが活性化してくる。ここでは、Horn/Kaiser (1986)の問題提起とそれをめぐる議論と87年の教授プラン案を中心に、性教育の取り扱いを見ていくことにする。

1. Horn/Kaiser (1986) の問題提起

Horn/Kaiser (1986) はBioS誌上で「第5～10学年の教科課程の内容に関する提案」(59-61)を行い、生物の授業のいっそうの発展のために公共の議論を呼びかけている。この提案では、8学年と9学年の構成は次のようになっている(表7)。

表7 Horn/Kaiser (1986) の提案

| 第8学年 | 第9学年 |
|----------------------------------|---------------------------|
| 人間 | 1. 植物での生命現象 |
| 1. 導入 | 1.1. 導入：生体・生物での生命現象 |
| 2. 感覚・神経系による情報の受容と情報処理 | 1.2. 被刺激性・興奮と運動 |
| 3. ホルモンの調整 | 光への反応；他の刺激への反応；刺激から独立した運動 |
| 4. 生殖と個人の発達 | すべての生物の生命現象としての被刺激性 |
| 5. 栄養と消化 | 1.3. 生殖と個人の発達 |
| 6. 呼吸 | 1.4. 物質とエネルギーの受容、転換および放出 |
| 7. 血液とリンパによる成分・物質の移送 | 2. 生物とその環境との関係 |
| 8. 排泄 | |
| 9. 身体を覆うこと、身体の維持および身体運動 | |
| 10. 新陳代謝とエネルギー代謝における器官系統の協力(系統化) | |

Horn/Kaiser の提案のねらいは、①生徒に人間における生物学的なものとの関係を始めからもっとはっきりさせ、②5～7学年で得た人間とすべての他の生物との共通性に関する、さらにまた生物に対する人間の生物学的および社会的に特殊なものに関する知識にもとづいて、進化思想をいっそう強調しようとするににあった(Pews-Hocke 1987)。そして、性教育に関する部分については、8学年の「人間の解剖学と生理学」を「人間」とし、その学年の最初のほうで、「生殖と個人の発達」を扱おうとするものであった。しかし、この提案をめぐるでは激しい賛否の議論がBioS誌上で繰り返されることになった。

2. Horn/Kaiser (1986) に対する賛成論

ここではPews-Hocke (1987) の総括をも参考にしながら、性教育に関する事柄に絞ってこの議論をまとめると、まず賛成論では、賛成の理由は、「生殖と個人の発達」が8学年の始めに置かれたことに関わっている。Böhme (1986) は、Horn/Kaiser の提案を3つの点で高く評価している。すなわち、①Hornらの提案の教材単元2, 3, 4は、他の教材単元よりももっと人間の生物学的および社会的本質へと向かうのに適しているし、②これまでよりも早く生徒に、人間の特殊性、自分自身、同胞、および環境に対する人間の責任を意識させることになり、また、③生殖と個人の発達についての授業を早めることで、青少年にその後の家族づくりへと準備させる新たな機会が開かれるとしている。Sehmrau (1986) もまた、HornとKaiserの提案一般に基本的に賛成し「生殖と個人の発達」の教材領域を学年の前のほうに置くことを肯定的に評価している。それは、これまでこの教材が8学年の終わりに置かれていたことで、他の教材のために切り

縮められてしまうことがあったからである。Sehmrauは、この教材が人格発達にとって重要だと理由で、性衛生上や性倫理上の観点で、そしてまた出産調整の可能性に関する知識に関して、もっと拡大されるべきだと考えている。

Bernburgの生物教科委員会も、感覚器官と神経系や生殖と個人の発達を8学年の始めに置くことは正しいと、この提案に賛成しているし(BioS 1986, Heft 9: 330-331)、Rengerも人間の器官系統の取り扱いの順序がひじょうによいと、この提案に賛成している(BioS 1987, Heft 5: 177)。

Bach(Bios 1986, Heft 9: 328-329)は、ひじょうに教育効果のある「生殖と個人の発達」の単元が提案では広げられていないことに失望しながらも、Böhmeの意見に賛成し、妊娠中絶や避妊の問題、性病、性行動、愛、パートナーシップ、結婚と家族の問題、さらにはホモセクシュアリティをも取り上げることが必要だと主張している。また、5学年でも思春期や性的成熟の加速化の問題を話し合うのに、性の問題を取り上げるのがいいとしている。ただ、生物の授業では自由に使える時間が少ないので追加で授業外の催しを教授プランで取り上げるべきだし、また生物が以上のテーマ全部をカバーできないので、教授プランにおいて他教科での性教育に関わる可能性を指摘しておくことが適切だとしている。

Schusterもまた8学年の教授プラン案に賛成した上で、生物の授業でのホモセクシュアリティの取り扱いを積極的に論じている(BioS 1986, Heft 11: 415-416)。まず近年この問題がより多く注目されてきているのに、教育雑誌ではそうになっていないから、Bach(1985)論文⁶がきわめて歓迎される状況にあることを確認している。その上で、Schusterは1968年生物教授プランの「青少年期をとくに考慮した産後の発育」でこのテーマを取り扱うことを提案している。その時間構成は大きくは3部からなる。すなわち、導入で青少年の手紙の抜粋を読み聞かせ、つづいて議論の中心に以下の質問を置く。「ホモセクシュアリティ」概念は何を意味するのか？ホモセクシュアリティは何か愛と関係があるのか？軽蔑のからかいの原因はどこにあるのか？そして討論の結果として最後に以下のことが述べられる。「ホモセクシュアリティは人間の愛とセクシュアリティの一形態であり、同性の人物への愛である。それは当該の人間の人格に属する。ホモセクシュアリティは病気でも異常でもなく、それは人間の性行動の一形態である」。ホモセクシュアリティ問題を積極的に採り入れようという意見は少ないものの、87年の教授プランでは、後にもるように、1つの重要な論点になる。

Torgau郡の生物教科委員会に委任されて寄稿したTomczakは、生殖と個人の発達を8学年の終わりに置こうとしない点で教授プラン案に賛成するが、学年始めではなく後期から取り扱うよう提案している(BioS 1986, Heft 10: 367-368)。その理由は、8学年を新たに受け持つ教員が自分の生徒をもっと正確に知り、必要な信頼の基礎をつくり出すには時間があるからというものであった。

他方、Leupoldは提案された教材構成は適切であると基本的に賛成するものの、この構想では「性教育」の一貫した線が見られないことを問題にしている。そこで5学年から10学年にかけてこのきわめて重要な問題に注意を向けさせ、上級学年(とくに8学年)ではもっとパートナー関

係の倫理的・道徳的局面を取り上げるべきだとしている (BioS 1986, Heft 9: 330).

3. Horn/Kaiser (1986) に対する反対論

しかし、BioS誌上では反対論の方がむしろ多い。拒否的な意見は、核心として次の点に関わるものであった (Pews-Hocke 1987: 329-330).

- ・[8学年の始めに置くためには]人間の器官系統と、脳によってコントロールされるそれらの機能が生徒に最初にもっと深く周知されていなければならないだろう。
- ・人間の脳の特異性と大脳皮質の働きはそうでなくても生物の授業では十分には説明できない、というのもこのような理論水準は普通教育を超え出ているからである。
- ・神経とホルモンの調整のすべての機能 (例えば、教材領域「感覚と神経の機能」、「ホルモン」および「生殖と個人の発達」での) は新陳・エネルギー代謝に依っており、したがって前者の理解は、後者に関する知識を前提としている。
- ・新陳・エネルギー代謝を取り扱うための物理と化学の予備作業は8学年始めて十分である。
- ・教材領域「感覚と神経の機能」を優先して「極めて困難な」教材領域から始めると、生徒の認識過程は単純なものから複雑なものへ、周知のものから未知のものへと導かれない。

こうして例えば、Körnigは神経系を8学年の始めに置くことは理解できないとして反対する。また生殖と個人の発達を早く扱うことについても、それ自体が問題というよりは、むしろ生徒の発達状況に応じて採り入れることを勧めている (BioS 1986, Heft 9: 327-328)。Gebauerも、8学年における教材の配置転換にそもそも反対し、現状を維持することを求めている (ibid: 329-330)。

SchulzeとHübnerは、次の理由で提案に反対する (ibid: 330-331)。8学年では生徒は「生物・社会的本質としての人間」のテーマに導かれて、獲得した知識を自分の現在と将来の生活態度において用いたり、意識的にそれにもとづいた生活をするように準備されねばならない。しかし「感覚器官と神経系」のあとに「生殖と個人の発達」を置くと、生徒はこれを「純粋に生物学的」なものだと理解することになる。そこでSchulzeとHübnerは、選択コース「健康教育」を構想して、そこで避妊、性病、パートナーに対する責任の問題など性教育のテーマを8学年の教材構成とは別に扱うほうが良いと考える。一方、Fritshkeは、教科課程の「人間」で得た知識が最終的には自分の身体健康維持の行動と他人の健康に対する責任意識に至るものでなければならないという理由から、性教育よりも健康教育を強調している (ibid: 329)。

Schüler (ibid: 331)は、提案では授業の科学性が担保されていないと批判する一方で、生殖と個人の発達の重要性から、それを試験へ採り入れることを提案している。Räker (ibid: 331-333)は提案された教材配置の3つの理由に反論して、その理由がまったく曖昧であると主張する。その上で、生殖と個人の発達が始めに置かれたことが今回の提案の唯一いいところだろうが、それは後ろに置かれると取り扱いの時間が少なくなったり、場合によってはまったく行われなくなるからという消極的な理由からだとする。彼によれば、どっちみち生徒の性的な問題や質

問を扱うには本来それぞれの学年で、約2時間はいる。5学年で女子の初経、7学年の終わりに
は最初の性的接触とその「リスク」、9・10学年では場合によっては匿名で出される質問を扱わ
ねばならない。

Scherpelz は8学年の教授プラン案について、きわめて問題があるとして拒否し、その対案と
して以下のことを提起している (BioS 1986, Heft 10: 362-366)。すなわち、導入の時間を切り詰
め、そのかわりに生物の領域における人間の位置を、生徒にそれがわかる遅い時点で、教授プラ
ンに挿入すること、これで得られた時間は、人間の生殖のテーマと関連づけて倫理と道徳、家族
教育等々の問題を生徒と議論するのに利用することである。しかしむしろ問題は、5学年 (人間
を含めた哺乳類) の生物の授業と8学年の人間の生殖までにある「断絶」のほうで、これは生殖
のテーマを学年の早い時期にずらしても埋め合わせることができない。加えて、青少年の成熟
は、この学年の終わりの成年式⁷後にこれらの問題を彼らと議論することができる程度に達して
いる。そこで考慮すべきは、どの時期に人間の生殖を授業で扱うかを定める当然の自由が学年特
有の個々のケースで教員に残されるように新たな教授プランをつくることができるかどうかであ
ろう。そして、この断絶を埋め合わせるのに次のような提案がなされている。①5学年における
教授プランのテーマである哺乳動物の生殖を拡大すること、②性教育の問題を、6学年の教授プ
ランの章2.4の「動物の類似性と人間の位置」へ採り入れること、③性教育の諸問題を、5学年
の教授プランに結びつけながら、そして成年式の準備の中で議論することを、まえがきおよび/
あるいは作成される指導教材 (Führungsmaterialien) の中で義務として定める (あるいは勧告
する) こと、④すでに7学年の関係する指導教材において、性教育の問題に関するテーマを持っ
た親の集会を行なうよう勧告すること。またこの提案が受け入れられたとしても、広義での生殖
と性教育の問題をもう一度第8学年の終わりで投げかけて、青少年の増した成熟度に応じて議論
することが不可欠だとしている。

また Schwarze は、提案された7学年の教授プランは生徒の側からのシンパシーを得ていない
から、教授プラン全体を現行通り保持するか、あるいは、これまで8学年で行なわれていた人間
生物学の教材を7学年に採り入れることを提案し、次のような「人間生物学」の教材配分案を示
している (BioS 1986, Heft 11: 412)。

表8 Schwarze の提案

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 導入 2. 運動と身体維持 3. 血液とリンパ 4. 感覚器官と神経機能 5. ホルモン 6. 生殖と個人の発達, 性行動 7. 栄養—呼吸—排泄, 物質・エネルギー代謝をふくめて 8. 復習, 体系化, 生物学の意義 |
|---|

健康教育と教員養成に携わってきた医師の Wolfgang Laass は健康教育の視点から Horn らの提案を検討している (BioS 1987, Heft 1: 11-14). SED 第 11 回党大会での中央委員会報告における「われわれの学校と社会の 1 つの重要な任務は、青少年を健康な生活様式へと教育し、彼らの身体的達成能力を発達させることである」のテーゼを受けて、Laass は「生物の授業の健康教育のポテンシャルをすべての学年段階にわたり適切な仕方でもみつきすこと」という視点からみて、Horn らの提案はこの局面を十分には考慮していないと批判している。

そのほか、Liedtke も Laass, Körnig, Gebauer, Råker や Scherpelz に賛成している (BioS 1987, Heft5: 176-177). また Horn (提案者とは異なる人物と思われる) は提案された教授プラン案は非論理的で問題があるとして、別の教材配置を提案している (BioS 1987, Heft 5: 175-176).

4. 性教育上での課題

以上の賛否両論をみると、生物の教授プラン構想における性教育上の課題が見えてくる。1 つは、生物における性教育の時期をめぐる問題である。生殖と個人の発達の取り扱いをこれまでよりも早く 8 学年の始めにおくことがようやく提起されたのである。2 つ目は、その取り扱いを始めにおくとしても、第 5 学年からの性教育上の「断絶」があり、それを克服する必要性が指摘されていることである。3 つ目には、ホモセクシュアリティの問題が性教育の課題として提起され始めている。そして最後に、人格の発達に重要な性的問題を扱うには、生殖と個人の発達を取り上げる時間数が少なすぎるという問題が浮き彫りになっている。

第 3 節 1987 年教授プラン案とそれをめぐる議論

こうした議論を経て、BioS1987 年 7/8 月号に第 6～9 学年の生物の教授プラン案 (⑱: Lehrplan Biologie Klasse 8 1987) が提示される。では、新たな教授プラン案は、以上のような問題提起と課題に応えるものであったであろうか。

1. 1982 年教授プランとの比較

まずこの教授プラン案の教材構成と時間数を 1982 年のものと比較してみると、以下のようになっている (表 9)。

項目を見ると、まず 1968・1982 年生物教授プランにあったタイトル「人間の解剖学、生理学および衛生」は 1987 年案ではもはや使われていないが、基本的な項目自体は 1982 年生物教授プランに「衛生の復習」があるだけで、変わっていない。次にその順序を見ると、1982 年生物教授プランでは「生殖と発達」の扱いが終盤に置かれているのに対して、1987 年案ではもう少し手前に置かれている。さらに時間数を見ると、全体の時間数は 60 時間と以前と変わらない。ただし、性教育に関わる「生殖と個人の発達」は 6 時間から 7 時間と 1 時間だけ増えており、また

表9 87年生物教授プラン案と82年生物教授プランとの比較

| 1982年 | 1987年案 |
|--|--|
| <p>人間の解剖学, 生理学および衛生</p> <p>1. 導入</p> <p>1.1 健康と業績達成能力にとっての衛生の意義および現代衛生の前提としての生物学の基本知識</p> <p>1.2 生物界における人間の地位</p> <p>1.3 人間生物の構造と生命事象の概観</p> <p>2. 物質・エネルギー代謝</p> <p>2.1 新陳代謝への導入</p> <p>2.2 栄養と消化</p> <p>2.2.1 栄養 2.2.2 消化管の構造と機能 2.2.3 正しい栄養と消化系の衛生 栄養素と作用物質/消化器の障害と病気</p> <p>2.3 血液とリンパ</p> <p>2.3.1 血管とリンパ系 2.3.2 血液とリンパの輸送・保護・防衛機能 2.3.3 応急処置と循環器の衛生</p> <p>2.4 呼吸</p> <p>2.4.1 呼吸器の概観 2.4.2 肺における呼吸運動とガス交換 2.4.3 呼吸器の衛生</p> <p>2.5 排泄</p> <p>2.6 物質・エネルギー代謝についての復習と体系化</p> <p>3. 皮膚</p> <p>3.1 皮膚の構造と機能</p> <p>3.2 皮膚の衛生</p> <p>4. 運動と姿勢</p> <p>4.1 運動・支持器官とそれらの機能</p> <p>4.1.1 骨-筋肉系の意義 4.1.2 運動器官の基礎としての収縮要素 4.1.3 骨格の一般的概観</p> <p>4.1.4 筋肉組織と骨格との共同作業 4.1.5 諸器官の共同作業</p> <p>4.2 支持・運動系の衛生</p> <p>4.3 支持・運動系の損傷—応急処置</p> <p>5. 感覚・神経機能</p> <p>5.1 感覚器官と神経系の共同作業への導入</p> <p>5.2 感覚機能</p> <p>5.3 神経機能</p> <p>5.4 感覚器官と神経系の衛生</p> <p>6. ホルモン</p> <p>6.1 ホルモン調整の基礎</p> <p>6.2 血糖レベルの調整</p> <p>7. 生殖と発達 (個人の発達)</p> <p>7.1 生殖—生物の基本的性質</p> <p>7.2 生殖器官の構造と機能</p> <p>7.2.1 女性の性</p> <p>7.2.2 男性の性</p> <p>7.3 胎児の発育</p> <p>7.3.1 受精と胚 (胎児) の発育 7.3.2 出産</p> <p>7.4 青少年期をとくに考慮しての産後の発達</p> <p>8. 衛生についての復習と体系化</p> | <p>1. 最高に発達した生物としての人間</p> <p>2. 物質・エネルギー代謝</p> <p>2.1 栄養と消化</p> <p>2.2 血液とリンパ</p> <p>2.3 呼吸</p> <p>2.4 細胞の物質・エネルギー代謝</p> <p>2.5 排泄と皮膚機能</p> <p>3. 感覚・神経機能</p> <p>3.1 感覚器官と神経系の協力</p> <p>3.2 神経系の機能</p> <p>4. ホルモン</p> <p>5. 生殖と個人の発達</p> <p>5.1 生殖</p> <p>5.2 個人の発達</p> <p>6. 姿勢と運動</p> <p>自由裁量の時間</p> |

表 10「生殖と個人の発達」の内容

| 1987年教授プラン案 | |
|---|---|
| <p>5. 生殖と個人の発達</p> <p>第5～7学年で獲得した、すべての生体のメルクマールとしての生殖と哺乳類の生殖に関する知識にもとづいて、生徒はこの教材領域で、<u>人間の生殖と個人の発達に関する知識を獲得する。彼らは、人間はその生殖を意図的に操作できること、および人間のセクシュアリティは生殖に結びつけられているわけではないことを理解する。これによって同時に、責任意識のある性的行動への教育に貢献がなされることになる。全体として本授業のすべての可能性が利用されて、生徒をわれわれの倫理的規範にあった、彼氏・彼女関係、愛、親性および結婚への態度を教育することになる。</u></p> <p>生徒は、出産後の発達段階を知り、それぞれの発達段階で、環境が人間の心身の発達に影響を及ぼすことを理解する。青少年が彼らの発達のこの段階における心身の変化を認識するのを助けるために、青少年期におけるセクシュアリティの問題がオープンに議論されねばならない。この教材領域の授業は、教員によって柔軟につくられねばならない。教員は、教材の取り扱い順序をきめる。その際には、クラスにおける状況が考慮されねばならない。</p> <p>5.1 生殖 (3時間)</p> <p>すべての生体のメルクマールとしての生殖 (第5～7学年の復習)：哺乳類の生殖—生殖器官、体内受精、子宮内での胎児の発育、出産 (第5学年の復習)、人間の生殖—性交での精子細胞の移送 (交尾)、卵子と精子の合一 (受精)、受精卵の形成、受精卵の新たな個体への発育。</p> <p>男性生殖器：精巣、副睪丸—精子の成熟、精子の貯蔵、輸精管—精子の移動、腺—精液の形成；前立腺、尿道と海綿体のある陰茎 (ペニス) の指摘—精液の放出；精子の構造；女性生殖器：卵巣—卵子の成熟、卵子の卵管への放出—移動と子宮での受け入れ、膣 (ヴァギナ)、陰唇、卵子の構造</p> | <p>月経周期：ホルモンによる脳下垂体・卵子・子宮の協働、子宮内膜の成長と排出、月経カレンダー、月経衛生</p> <p>生殖の意識的コントロール、避妊、例えば生物学的、機械的、化学的避妊手段；生殖に結びつかない人間のセクシュアリティ、ホモセクシュアリティの指摘；性感染症—認識、保護、申告義務；ガン、女性と男性の定期検診；性器の衛生、性の衛生、頻繁にパートナーシップを取り替える危険の指摘</p> <p>5.2 個人の発達</p> <p>受精した卵子からいくつかの発達段階を経て死に至る発達としての個人の発達、産前と産後の発育；産前の発育と妊娠の経過、卵管での受精した卵子 (受精卵) の分割、胚の子宮内膜への着床、その後の卵子の発育のホルモン抑制、妊娠の始まり；胎児の発育、卵膜 (Fruchthüllen) の形成、羊水による保護、胎盤 (Plazenta) と臍帯の形成、母体からの栄養補給、内的器官と外形の分化；妊娠7か月以降の母体外での成長、生活能力；一卵性・二卵性双生児の指摘</p> <p>妊娠中の健康な生活態度に対する特別な要求、身ごもった子に対する親の責任、母子に対する社会のケア、妊婦に対する行動の指摘</p> <p>出産過程—陣痛；開口、娩出、後産；臍帯切断；血液中の二酸化炭素過剰による新生児の最初の呼吸運動；新生児の吸飲反射；ホルモンの働きによって乳腺が機能することができること (乳の分泌)；クリニックにおける出産監視の指摘</p> <p>産後の発達：出産後の発達—乳児期、幼児期、初学期童期、青少年期、大人期、死；心身の発達に環境が及ぼす影響；われわれの社会の諸条件の意識的な利用；加速化の指摘；青少年の発達—思春期における性的成熟の出現；男女の性徴と性的成熟の徴候；男女での成熟発達の開始、期間および終結の違い；青少年期における彼氏・彼女関係、愛、パートナーシップ</p> |

「自由裁量の時間」が2時間とられている。

次に、直接性教育に関わる「生殖と個人の発達」の項目とその内容を比較してみよう (表3と表9・10)。

87年案の大きな特徴は、まず何よりも、全体としては70年代と同様に、「生徒をわれわれの倫理的規範にあった、彼氏・彼女関係、愛、親性および結婚への態度を教育すること」が性教育

の目標として目指されているとしても、①「人間はその生殖を意識的に操作できること」、②「人間のセクシュアリティは生殖に結びつけられているわけではないこと」を生徒に理解させるとしている点にある。しかも、第2に、その際、教員に対しては、①これまでの教授プランにあった「青少年期におけるセクシュアリティの問題がオープンに議論されねばならない」ことに付け加えて、②クラスの状況を考慮しながら、教材の取り扱いの順序を柔軟に決めることを求めている。教員の自由裁量を認めたのである。

第3に、68年の「生殖器官の構造と機能」が「生殖」にまとめられ、そこでは大きくは①人間の生殖、②性器の構造と機能、③月経周期、④生殖の意識的コントロールその他が取り扱われ、避妊と避妊手段およびホモセクシュアリティがはじめて生物教授プランに採り入れられている。

第4に、68年の「胎児の発育」と「青少年期をとくに考慮しての産後の発達」が「個人の発達」としてまとめられ、そこで受精した卵細胞、妊娠・出産から死に至るまでの個人の発達が扱われている。とくに青少年期の問題として、性的成熟の「加速化」と「青少年期における彼氏・彼女関係、愛、パートナーシップ」が扱われているのが特徴的である。

2. 教授プラン案に対する批判

たしかにこの教授プラン案では、教材領域「生殖と個人の発達」を早めるという多くの教員の願いは、少しは実現されている。また避妊や生殖に結びつかないセクシュアリティ、そしてホモセクシュアリティがはじめて取り上げられたのも画期的なことであった。しかしこの教授プラン案には、いくつもの問題があった。

この教授プラン案に対して手厳しい批判を加えたのが、Borrmann (1987) である。「社会的に必要で生徒と多くの教員が期待していた、よりよい、生物学にもとづいた性教育に関する蓄えの開発が明らかに断念された」と。それは、「セクシュアリティ」という概念が放棄されて、「生殖と個人の発達」という伝統的なタイトルが用いられていることにすでに表現されているという。Borrmann によれば、むしろ「セクシュアリティ、生殖および個人の発達」というタイトルのほうが、今日生きている人間を長い発達系列の環として示すばかりではなく、その人間の特殊性をも示すという、第8学年における生物の授業の案件にかなっているであろう」(359)。

第2に、性科学者や性教育学者は80年代にはすでにセクシュアリティ概念を広義にとらえ、そこに快楽の側面をも含み込んでとらえているのに（この点については池谷2013a, 参照）、87年生物教授プラン案では、セクシュアリティ概念が用いられないばかりか、性における快楽の側面もいまだに扱われていない。それは、性器のところでクリトリスと勃起が扱われていないことに示されている。しかし、「成長期にある者に、個人の生活と社会の生活において性的なものを価値評価することができるようにさせるためには、彼らに、人間のセクシュアリティは生殖に結びついていないと言うのみでは明らかに十分ではない。不可欠であるのは、人間のセクシュアリティは快楽獲得へと目的を移し変えたということと同時に伝えることである」(360)。

第3に、Borrmannは、生殖の意識的なコントロールのところで、避妊がそれだけで扱われていて、「家族計画や意識的な親性 (Elternschaft)」と結びつけられていないし、妊娠中絶の問題も組み込まれていないことを問題にしている。

最後に、ホモセクシュアリティの問題が取り上げられたこと自体は「一つのかんりの進歩」であるが、この問題をコントロールされた生殖と結びつけるよりも、ホモセクシュアリティを、「ヘテロセクシュアリティと並ぶもう一つの性行動の形態」として示すことのほうがよいであろう (360)。そうすれば、「自慰 (masturbation)」や「ペッティング」も扱う機会も生まれることになろう。

Neubauer (1988) もまた、Borrmannの提起を受けて、①生殖とセクシュアリティ (社会的な性規範を含めて) の分離、②クリトリス、勃起、masturbationおよびペッティングを組み入れることを求めている。

Skerra (BioS 1988, Heft 1: 6) は、この教授プラン案よりも1986年のHorn/Kaiser案に賛成する。教材領域「生殖と個人の発達」が前に置かれたことは歓迎しているが、この教材領域が内容的にさらに広げられること、例えば避妊の問題や性病の問題にもっと多くの時間をかけることを望んでいる。

Walther (ibid.: 6-7) は、教材領域「生殖と個人の発達」の内容づくりの点では、Borrmann (1987) の提案を強く支持し、AIDSを授業教材に含めることは緊急に必要だとしている。そして、教材領域「人間の生殖と個人の発達」の配置に関して、次のように述べている。「このテーマ全体の授業での取り扱いが時間的に成年式の時間「君の隣の他者 (Der Andere neben Dir)」のもっと近くに寄せることができれば、それが理想であろう。そうすればもっとよい相互の補いと相互作用が達成されるだろうからである。これは私見では、この年齢の生徒に関心のあるたぐさんの生物学的、心理学的および社会学的な問題と教授プランによる7時間という限られた時間のもとでは、緊急に必要なことである」。そして、具体的には次の提案を行っている。「教材領域2 (新陳・エネルギー代謝) に引き続いてまず教材領域3としてホルモンを扱い、それに教材領域4として生殖をつなげること」である。

Bach (1989) もこの生物教授プラン案を批判している。その1つは、専門雑誌で論議されているのに、Erwin Güntherをのぞいては医師がこの論議には参加していないことである。その理由を示唆する1つのエピソードとして、Bachは、下級段階教員の性教育での継続教育に関するHarald Stumpeの経験報告が教育雑誌の『下級段階 (Unterstufe)』編集部によって拒否されたという事件を挙げている (22)。

第2の問題点は、生物教授プラン委員会が、現在までに確保されている性科学、性心理学および性教育学の認識水準を教授プラン案へと組み入れていないことである。具体的には、①授業外での性教育の機会がもっと取り上げられること、②第8学年ではじめて「思春期における性的成熟の形成、女子と男子における性徴と性的成熟の徴候、成熟発達の開始、期間と終結の違い……」(教授プラン案) に習熟させるのは理解できないこと、③18歳以下での中絶率が高く、計

論過程でも生物教員がたびたび指摘しているのに、中絶問題が何ら問題とされていないこと、などが指摘されている (ebd.).

3. Pews-Hocke の評価

以上のような批判的な意見が数多く出されているにもかかわらず、Pews-Hocke (1988) は提案当事者として、生物教授プラン案が賛成され建設的な指摘がなされたと楽観的に評価している。その上で、8 学年教授プランを完成する際にもう一度注意すべきいくつかの問題を取り上げている。それは本質的なものへの志向、生徒の活動、体系化、教材の時間比率、教材の配置である。この教材配置の問題において、生殖と個人の発達の問題が触れられている。Pews-Hocke によれば、1 から6 までの教材領域の配置には圧倒的に賛成が得られた。それは総じて教材領域5 「生殖と個人の発達」を前に配置することに見られた。これによって生徒にこれまでよりも早く人間の生殖と個人の発達に関するひじょうに重要な知識を周知させる可能性が与えられたのであり、この点で「人間のセクシュアリティの問題もまた生物の授業の対象である」(357) と指摘している。

その一方で、生物の授業で健康教育のアスペクトをもっぱら一面的に強調する同号の Laass の論文 (1988) の提起が「生物の授業の健康教育への還元」(358) だとして厳しく批判される。Pews-Hecke は、第7回と第8回の健康教育国民会議での保健衛生大臣 Mecklinger の報告 (Mecklinger 1984; 1989) にもとづき、次のように結論づける。健康教育は社会全体の案件であり、「生物の授業はそれに対して特有な貢献をなす」。だが、この貢献は、生物の授業を健康教育に還元するものではなく、とりわけ次のことに対する基本的な知識を伝達し発展させることにある (359)。

- 自分の身体の健康と達成能力の維持と促進 (……)
- 相互の尊重と支援、同志的な協力と支援、相互の配慮 (例えば、男女間のとりわけ結婚と家族における責任意識あるパートナーシップ、労働集団における関係および若者と老人との関係) といった社会主義道徳の規範によって刻印されている人間間の関係づくり
- 能動的な、文化豊かなそして変化に富んだ余暇づくり
- 衛生行動と自然における環境を意識した行動の発展ならびに環境保護と農村文化に対する社会的取り組みでの能動的な協力。

第4節 1989年生物教授プランの特徴と問題点

こうした議論を経て、1989年に生物教授プランが出され (⑨: Ministerium für Vollsbildung 1989), 8 学年と9 学年の教授プランは、1991年9月1日から発効することとされた。では89年生物教授プランはどう変わったのであろうか。

1. 89年生物教授プランの特徴と問題点

まず89年教授プランを87年案と比較すると、8学年の構成はほとんど変わってはいない。しかし、その内容を比較してみると、ある程度は批判者の意見が取り入れられていることがわかる(表11)。

まず第1に、Borrmannが批判した点、すなわち「生殖と個人の発達」という伝統的なタイトルを「セクシュアリティ、生殖および個人の発達」というタイトルにすべきだという意見が意識されてか、タイトルそのものは変えられていないが、目指すべき知識が「人間の生殖と個人の発達に関する知識」から「人間の生殖、セクシュアリティおよび個人の発達に関するさらなる知識」へと変更されている。また、これと関連して、「われわれの倫理的規範にあった、彼氏・彼女関係、愛、親性および結婚に対する態度」への教育に「パートナーシップ」が付け加えられて、「彼氏・彼女関係、愛、パートナーシップ、親性および結婚に対する態度」を意識化させることへと変更されている。「教育・訓育」から「意識化」への転換も重要であろう。ここには「教化」の意味合いが薄められていると思われるからである。

第2に、生殖器のところで、新たに男性生殖器の説明に、「硬直」と「包皮をかぶった亀頭」が追加されている。もっとも「勃起」という言葉は使われていない。また、女性生殖器のところで、「クリトリス」が新たに付け加えられている。ただしセクシュアリティの快樂という側面は、相変わらず言葉として提示されていない。1980年代には、Borrmannも含めて多くの性科学者や性教育者がセクシュアリティの快樂の側面を認知し始めているにもかかわらずである。

第3に、1987年案では「ホモセクシュアリティ」が「生殖に結びつかない人間のセクシュアリティ」と並んで挙げられていた。つまり、ホモセクシュアリティは生殖に結びつかないセクシュアリティとしてまだ否定的なニュアンスを帯びていた。しかし、89年プランでは、人間関係の性的形態の1つとして、ホモセクシュアリティがヘテロセクシュアリティと並んで取り上げられている。この変化はきわめて重要な意味をもつ。ホモセクシュアリティの指摘がネガティブな位置づけから肯定的なものへと変更されたからである。ここには、BorrmannやBach(1985)らの指摘もさることながら、80年代に切り開かれたホモセクシュアルたちの運動とその成果が反映されていることはたしかであろう(池谷2013b)。

第4に、1987年案では取り上げられていなかった「妊娠中絶」の問題がようやく取り上げられている。避妊と妊娠中絶があくまでも新たにまとめられた「家族計画」の項目に入れられてしまっているという制約があるにせよ、それらが取り上げられたことの意義は、遅きに失しているとはいえ、ひじょうに大きい。「妊娠中絶」については、82年の「7～10学年生物教授プラン」でも、8学年教授プランは1968年教授プランとほとんど変わらず、母子保護法(1950年)を挙げているだけで、「妊娠中絶法」にはまったく触れていなかったし、87年案でもまだ取り上げられていなかった。

しかし、1991年から発効することになっていたこの教授プランは、DDRの再統一のなかで実施されることはなかった。

表11 87年案と89年プランとの比較

| 1987案 | 1989プラン |
|---|---|
| <p>5. 生殖と個人の発達</p> <p>第5～7学年で獲得した、すべての生体のメルクマールとしての生殖と哺乳類の生殖に関する知識にもとづいて、生徒はこの教材領域で、<u>人間の生殖と個人の発達に関する知識</u>を獲得する。彼らは、人間はその生殖を意識的に操作できること、および人間のセクシュアリティは生殖に結びつけられているわけではないことを理解する。これによって同時に、責任意識のある性的行動への教育に貢献がなされることになる。全体として本授業のすべての可能性が利用されて、生徒をわれわれの倫理的規範にあった、<u>彼氏・彼女関係、愛、親性および結婚に対する態度を教育することになる。</u></p> <p>生徒は、出産後の発達段階を知り、それぞれの発達段階で、環境が人間の心身の発達に影響を及ぼすことを理解する。青少年が彼らの発達のこの段階における心身の変化を認識するのを助けるために、青少年期におけるセクシュアリティの問題がオープンに議論されねばならない。この教材領域の授業は、教員によってフレキシブルにつくられねばならない。教員は、教材の取り扱い順序をきめる。その際には、クラスにおける状況が考慮されねばならない。</p> <p>5.1 生殖 (3時間)</p> <p>すべての生体のメルクマールとしての生殖 (第5～7学年の復習)：哺乳類の生殖—生殖器官、体内受精、子宮内での胎児の発育、出産 (第5学年の復習)、人間の生殖—性交での精子細胞の移送 (交尾)、卵子と精子の合一 (受精)、受精卵の形成、受精卵の新たな個人への発育。</p> <p>男性生殖器：精巣、副睪丸—精子の成熟、精子の貯蔵、輸精管—精子の移動、腺—精液の形成；前立腺、尿道と海綿体のある陰茎 (ペニス) の指摘—精液の放出；精子の構造；女性生殖器：卵巣—卵子の成熟、卵子の卵管への放出—移動と子宮での受け入れ、膈 (ヴェギナ)、陰唇、卵子の構造</p> <p>月経周期：ホルモンによる脳下垂体・卵子・子宮の協働、子宮内膜の成長と排出、月経カレンダー、月経衛生</p> <p>生殖の意識的コントロール、避妊、例えば生物学的、機械的、化学的避妊手段；生殖に結びつかない人間のセクシュアリティ、<u>ホモセクシュアリティの指摘</u>；性感染症—認識、保護、申告義務；ガン、女性と男性の定期検診；性器の衛生、性の衛生、頻繁にパートナーシップを取り替える危険の指摘</p> | <p>5. 生殖と個人の発達</p> <p>第5学年で獲得した、哺乳類の生殖に関する知識にもとづいて、生徒はこの教材領域で、<u>人間の生殖、セクシュアリティおよび個人の発達に関するさらなる知識</u>を獲得する。彼らは、生殖器官に関する彼らの知識を広げ、月経サイクルを例にして、ホルモンの作用に関する彼らの知識を深める。</p> <p>生徒は、人間はその生殖を意識的にコントロールできること、そして人間のセクシュアリティは生殖に結びつけられているわけではないことを理解する。人間の生殖と個人の発達に関する知識を伝達することで、生物の授業は、生徒を責任意識にあふれた性的行動へと訓育し、また彼らに、われわれの倫理的規範にあった、<u>彼氏・彼女関係、愛、パートナーシップ、親性および結婚に対する態度を意識化させる。</u></p> <p>生徒は、母体における胎児の発育に関する彼らの知識を広げる。彼らは、妊娠期間中健康な生活態度が特に求められることを把握する。</p> <p>生徒は、産後の発達段階を知り、それぞれの発達段階で、環境が人間の心身の発達に影響を及ぼすことを理解する。青少年が彼らの発達の段階における心身の変化を認識するのを助けるために、青少年期におけるセクシュアリティの問題がオープンに議論されねばならない。</p> <p>この教材領域における授業は、教員によって柔軟につくられねばならない。教員は、教材の取り扱い順序を決定する。その際には、クラスにおける状況が考慮されねばならない。</p> <p>5.1 生殖 (3時間)</p> <p>哺乳類の生殖—生殖器官、受精した卵子からの子孫の発育、体内受精、子宮内での胎児の発育、出産 (第5学年の復習)</p> <p>人間の生殖—性交での精子の移送 (交尾)；卵子と精子の合体、受精卵の新たな個体への発育。</p> <p>男性生殖器と女性生殖器：</p> <p>精巣と副精巣—精子の形成、精子の貯蔵、輸精管—精子の移動；腺—精液の形成；前立腺の指摘；尿道と海綿体のある陰茎 (ペニス)—精液の放出、硬直；包皮をかぶった亀頭；精子の構造</p> <p>卵巣—卵子の形成；卵子の放出；卵管での受け入れ—卵子の子宮への移動；膈；陰唇—保護；<u>クリトリス</u>；卵子の構造</p> <p>月経：</p> <p>月経サイクル、子宮内膜の一部の成長と排出；ホルモンによる卵巣と子宮の共同作用；脳下垂体腺による上位でのコントロール；月経カレンダー；月経衛生</p> |

表 11 87年案と89年プランとの比較（つづき）

| 1987 案 | 1989 プラン |
|--|--|
| <p>5.2 個人の発達</p> <p>受精した卵子からいくつかの発達段階を経て死に至る発達としての個人の発達，産前と産後の発育；産前の発育と妊娠の経過，卵管での受精した卵子（受精卵）の分割，胚の子宮内膜への着床，その後の卵子の発育のホルモン抑制，妊娠の始まり；胎児の発育，卵膜の形成，羊水による保護，胎盤と臍帯の形成，母体からの栄養補給，内的器官と外形の分化；妊娠7か月以降の母体外での成長，生きる能力；一卵性・二卵性双生児の指摘</p> <p>妊娠中の健康な生活態度に対する特別な要求，身ごもった子に対する親の責任，母子に対する社会のケア，妊婦に対する行動の指摘</p> <p>出産過程—陣痛；開口，娩出，後産；臍帯切断；血液中の二酸化炭素過剰による新生児の最初の呼吸運動；新生児の吸飲反射；ホルモンの働きによって乳腺が機能することができること（乳の分泌）；クリニクにおける出産看視の指摘</p> <p>産後の発達：出産後の発達—乳児期，幼児期，初期学童期，青少年期，大人期，死；心身の発達に環境が及ぼす影響；われわれの社会の諸条件の意識的な利用；加速化の指摘；青少年の発達—思春期における性的成熟の出現；男女の性徴と性的成熟の徴候；男女での成熟発達の開始，期間および終結の違い；青少年期における彼氏・彼女関係，愛，パートナーシップ</p> | <p>家族計画： 生殖の意識的コントロール；生殖に結びつかない人間のセクシュアリティ；<u>避妊—生物学的，機械的，化学的避妊具・薬；妊娠中絶のリスクと起りうる結果の指摘</u></p> <p>性器の衛生と，性感染症，AIDS，淋病，梅毒の回避とによる身体の健康維持—保護，申告義務；頻繁にパートナーシップを取り替える危険の指摘 ガン—男女の定期的な予防健診</p> <p>5.2 個人の発達</p> <p>受精した卵子からいくつかの発達段階を経て死に至る発達としての個人の発達</p> <p>産前の発育と妊娠の経過： 卵管での受精卵の分割，胚の子宮内膜への着床；妊娠の始まり 胎児の発育；卵膜の形成；羊水による保護；胎盤の形成，臍帯を通じて母体からの胎児の栄養補給</p> <p>内的器官と外形との分化；成長；妊娠7か月以降の母体外で生きる能力；一卵性・二卵性双生児の指摘</p> <p>妊娠中の健康な生活態度に対する特別な要求；身ごもった子に対する親の責任 母子に対する社会のケア，妊娠相談；妊婦に対する行動の指摘</p> <p>出産過程—陣痛；開口，娩出，後産</p> <p>血液中の二酸化炭素過剰による新生児の最初の呼吸運動；新生児の吸飲反射；ホルモンの働きによって乳腺が機能することができること（乳の分泌）；クリニクにおける出産看視の指摘</p> <p>産後の発達： 出産後の発達—乳児期，幼児期，初期学童期，青少年期，大人期，死；発達段階における人間の心身の発達に環境が及ぼす影響，例えば緊密な親子関係，人格発達のためにわれわれの社会の諸条件の意識的な利用</p> <p>青少年の発達—思春期における性的成熟の形成；男女での性徴と性的成熟の徴候；男女での成熟発達の開始，期間および終結；加速化の指摘</p> <p>青少年期における彼氏・彼女関係，愛，パートナーシップ；<u>ヘテロセクシュアリティ，ホモセクシュアリティの指摘</u></p> |

第5節 89年教科書の特徴と問題点

ではこの時期、教授プラン案が検討されている時期の教科書の内容はどう変化しているであろうか。

ここでは1989年の教科書(Baer 1989)を取り上げる。これは1982年初版(Baer 1982)の第6版であるから、基本的には1968年・82年生物教授プランにもとづいたもので、80年代の生物教授プランをめぐる議論の成果が含まれてはいないという一定の制約がある。それを踏まえた上で、まずこの教科書の目次を1970年の教科書(72年の教科書もまったく同じ)と、生殖と個人の発達に関する部分に関して比較してみると、両教科書の間にはその構成については、基本的な変化がみられない。しかし、内容を見ると、さすがに大きな変更が行われている。

まず第1に、89年教科書のほうが全体としてより詳しく説明されている。例えば、「産前の発育」の中で、「精子は女性の体内で2日まで生きることができる。成熟した卵細胞は短い間しか生きることができないので、受精は排卵後のわずかな時間内で行なわれない」ことが記されているし、「胚の発育」も細かく説明されている。また「出産」のところでも、臍帯の切断や胎盤の排出が細かく説明されている。

第2の特徴は、最初に人間の生殖が性交から始まることをはっきりと書いていることである。70年教科書では「受精」に関わって「精子は生殖器の結合の際に陰茎から膣へと排出される」(124)とされていて、具体的なことは記されていない。これに対して89年教科書では、「人間の生殖は男性の精子が女性の生殖器官へと送られること(性交 Begattung)から始まる」(137)こと、「性交で、精子が硬直した陰茎から膣へと移送される」(143)ことが明記されている。

第3に、生殖器に関しては、女性生殖器では内性器の保護機能を持つものとして処女膜が挙げられるとともに、クリトリスが「女性性器の神経がたくさんある刺激中心部」として記されている。他方、男性生殖器では、陰茎が男性の性交器官であることが記されているし、「亀頭」が説明されている。また、「夢精(Pollution)」が概念としてはじめて登場している。70年教科書では、夢精という言葉は用いられずに、「性的成熟の開始後、精液が自らの意志によらずにさまざまな間隔で睡眠中に、しばしば生々しい夢のあいだに、ペニスをとおして排出される」(133)といくぶん恐ろしいものとして描かれていた。これに対して、89年教科書は客観的に、「精液が自らの意志によらずに異なる間隔で睡眠中に排出される(夢精)」(150)と説明しているだけである。

第4に、避妊と妊娠中絶という言葉が用いられ、それらについて詳しく説明されていることが89年教科書のもう1つの特徴である。70年教科書は、すでに見たように、避妊という行為を説明してはいたが避妊という言葉は用いず、「出産調整」や「家族計画」という言葉を用いている。また妊娠中絶という言葉は72年以前ということもあり出てこない。しかし、89年教科書になると、月経との関わりで、「避妊」も「ピル」も次のように詳しく説明され、「避妊具・薬」の写真

が載せられている(140).

卵細胞の発育へ及ぼすホルモンの影響について知ることによって、人はこの事象に影響を及ぼすことができる。薬(ホルモン剤)を摂取することで、受精能力のある卵細胞の形成を阻むことができる。ホルモン調節と身体的発育の障害を避けるために、このようなホルモン剤(例えば、排卵抑制剤、「ピル」)の摂取は医師の監督のもとでのみ行なわれてよい。避妊薬は医師のみが処方できるのであって、関係する診察の後にどの女性にも適切なホルモン剤を決める。なお避妊には別の手段(例えば機械的な手段)と可能性(例えば、受精可能な日—およそ10~16日サイクル日に—)に注意すること)があるが、これについてはどの婦人科医も情報を与えることができる。

妊娠中絶については、望まない妊娠の場合に妊娠中絶できることだけではなく、そのリスクについても触れている(154)。

わが共和国の全市民は、結婚・性相談所あるいは医師のところで、彼らに適切な家族計画の措置について情報をもらうことができる。それでも望まない妊娠がおこれば、女性の願いにもとづいて、遅くとも妊娠12週までなら、病院で妊娠中絶をしてもらうことができる。(……)だけれども妊娠中絶は、専門的に行われても、常に女性のリスク(例えば、心理的負担、長期の病気、持続的な不妊の可能性)と結びついている。それゆえ女子・女性は皆妊娠中絶の申請を、いずれにせよその前によく徹底的にそして全面的に、考え抜かねばならない。

最後に「性交」の扱いが両者の教科書では大きく異なる。70年教科書では、男女の結婚に至るまでは、性交を抑制すべきだという考えが見られた。しかし89年教科書になると、こうした抑制はもはや説かれていない。ただ次のように述べられているだけである。「男性と女性との性的結合は、なによりも男女の間の深い好意、愛の表現である。愛し合う人々は、それゆえしばしば性的結合への自然な欲求を持っているが、それと子どもへの願望は結びつくものではない」(153)。

次に、第8学年用教科書を Borrman らの批判に照らしてみると、第1に、セクシュアリティの概念は、たった1か所、「青少年期と達成期」のところで用いられているだけである(「友情、愛、セクシュアリティの概念の内容に関して、クラスの仲間と討論しよう!」)(153)。第2に、快楽という概念は出てこないし、マスターベーションもペッティングも触れられていない。ただ、すでに見たように「クリトリス」が新たに挙げられている。第3に、ホモセクシュアリティはまったく取り上げられていないが、妊娠中絶については「青少年期と達成期」のところで、家族計画と結びつけられてきちんと触れられている。

こうして見てみると、89年教科書はたしかに70・72年教科書と比べれば、避妊や妊娠中絶を

きちんと取り上げている点や、青少年の性交を積極的ではないにせよ認めている点では、大きく前進してきてはいる。しかし、1989時点にあってもなお、生物の教科書では、セクシュアリティという概念はまったくと言ってよいほど用いられず、また性の快樂の側面についても、性教育学者たちが80年代にセクシュアリティの快樂の側面を強調し始めているのに、ほとんど触れられずじまいである。さらにホモセクシュアリティに至ってはまったく触れられていないといったありさまであった。公共の世界では、公然とホモセクシュアリティをめぐる議論や会議が開催されてきているにもかかわらず、教科書の世界ではまったく触れられていない。この点で、89年教科書は、82年生物教授プランにもとづいているとはいえ、82年時点からまったく変わっていないのである。

おわりに——まとめにかえて

1. これまでの要約

以上の検討を通して、この間の性教育部分に関する生物教授プランの変化は次のようにまとめられる。

①性教育に関する部分は、1968年生物教授プランでは、「人間の解剖学と生理学」から「人間の解剖学、生理学および衛生」へと変更されたタイトルのもとで、ようやく8学年に下ろされ、そこで集中的に教えられることになった。しかもそのタイトルもまた「人間の生殖器官と個人発達の発達」から「生殖と発達」に変更されている。また「出産」がようやく取り上げられ、青少年期の記述も充実してきた。すなわち、「青少年期を考慮しての産後の発達」が独立し、そこで人間の発達段階と青少年の性的成熟が取り上げられ、青少年期のセクシュアリティ問題がオープンに議論することが求められたのである。また、衛生が生殖との関わりで論じられるようになり、「射精」がはじめて取り上げられている。しかし、その反面いくつもの課題が残された。1つは、避妊や妊娠中絶の取り扱いであり、2つめはセクシュアリティの快樂やコミュニケーションの側面であり、最後にホモセクシュアリティの取り扱いであった。

②89年生物教授プランになると、「人間の解剖学、生理学および衛生」のタイトルはすでに消え、「最高に発達した生物としての人間」という視点から、「生殖と個人の発達」が論じられている。しかもそこで目指すものも、1968年生物教授プランでは生殖・成長・発達に関する知識が中心であったが、ここでは「人間の生殖、セクシュアリティおよび個人の発達に関するさらなる知識」へと変更され、セクシュアリティが重視されてきている。また、態度の育成に関しても、1968年生物教授プランでは妊娠と出産との関わりで社会主義道徳が強調されていたのに、ここでは「彼氏・彼女関係、愛、パートナーシップ、親性および結婚に対する態度」の意識化が目指されている。

また、「避妊」と「妊娠中絶」の問題がようやくここで取り上げられているし、「セクシュアリティの快樂」については相変わらず言葉として提示されていないが、新たに男性生殖器の説明

に、「硬直」と「包皮をかぶった亀頭」が追加され、女性生殖器のところでは「クリトリス」が新たに付け加えられている。さらに、1987年案で「生殖に結びつかない人間のセクシュアリティ」と並んで挙げられていた「ホモセクシュアリティ」が、89年プランでは、性的な人間関係の1つとして、ヘテロセクシュアリティと並んで肯定的に取り上げられたのも画期的なことであった。

また、この間の教科書の変化については次のことが指摘できる。

①70年教科書は、それまでの教科書『人間学』や『人間』と違って、いくつかの点で進歩していた。まずはじめて性交が取り扱われている。しかし、その扱いはまだ抑制的で、婚前性交は好ましくないものとされていた。また、月経がそれ以前の教科書よりも詳しく取り上げられているとともに、精通の現象も、言葉自体としては用いられてはいないが、はじめて取り上げられている。さらに、これまでの教科書と違って、出産過程と産後の発達の詳細に記述され、母子の保護という視点が付け加えられているのもこの教科書の特徴であるし、DDRにおける積極的な家族重視政策のもとで彼氏・彼女関係やパートナー関係、家族も取り扱われ始めている。

しかし、抑制的な性の取り扱いの下では、これまでの教科書と同様に、避妊や妊娠中絶はそれ自体としては取り上げられてはいない。妊娠中絶はまだ非合法ということもあり取り扱われてはいないが、避妊のほうは「出産調整」という言葉で、家族計画との関わりで控えめに論じられているだけである。また、マスタベーションも、いわんやホモセクシュアリティの問題もまったく取り上げられておらず、男女の異性愛が暗黙の前提とされている。

②82・89年教科書になると、性交が生殖との関連でより詳しく書かれてくるだけでなく、男女間の愛の表現として自然なものとして扱われている。また、生殖器に関しても、クリトリスがはじめて登場し、陰茎が男性の性交器官であることが記され、「亀頭」が説明されている。また、「夢精(Pollution)」が概念としてはじめて登場している。さらに、避妊と妊娠中絶という言葉が用いられ、それらについて詳しく説明されている。その際、望まない妊娠の場合に妊娠中絶ができることだけでなく、そのリスクについても触れている。

もっとも、セクシュアリティの快樂の側面は、1989年生物教授プランと同様に、相変わらず表立っては取り上げられてはいないし、これに関連してマスタベーションやベッティングも触れていない。さらに、1987年プラン案で取り上げられていたホモセクシュアリティについても、まったく取り上げられていない。これらの点で89年教科書は、82年時点からまったく変わっていない。

このようにみえてくると、89年の生物教授プランや89年教科書はそれ以前のものに比べると、いくつかの進歩があったとはいえ、80年代の性科学や性教育学の進展からみれば、それから遅れていると言わざるを得ない。第1に、80年代にセクシュアリティの重要な側面として取り上げられてきた快樂の問題が相変わらず取り上げられていないし、第2に、80年代に湧き上がってきたホモセクシュアル当事者の運動やホモセクシュアリティ研究が十分には活かされているとは言えないからである。

2. 生物教授プランの段階区分について

Dietrich/Kummer (1979) は、1979年までの生物の授業の発展を3つの段階に分けている。すなわち、①第1段階：1945年春から1949年までの反ファシズム・民主主義学校改革の時期を含む生物授業の反ファシズム・民主主義的変革期、②第2段階：1949年秋から60年代初頭までの、社会主義学校における生物授業の構築期、③第3段階：社会主義学校の内容の仕上げ期における生物の授業（1963年以降）、である（401-402）。また、学校法との関連で生物教授プランの成立を見ると、生物教授プランの変遷は、①ソ連占領期における1947年学校法下での暫定的な生物教授プランの時期、②1951年生物教授プランから1959年生物教授プラン成立までの時期、③1959年学校法下での生物教授プランの時期（1968年まで）、④1965年学校法下での1968年生物教授プランの時期（1989年まで）、⑤1989年生物教授プランからドイツ再統一までの時期、の4つに区分することができる。

しかし、池谷（2014）と本論文の検討から、生物の教授プランを性教育との関係でみると、50年代の時期は50年代前半の時期、50年代半ばの社会主義学校をめぐる論争期、59年生物教授プラン成立までの3つの時期に分けられるし、1968年以降から再統一までの時期も、80年代前半までと、80年代半ばの論争から87年生物教授プラン案の提起までの時期および再統一までの時期に細分することができる。かくして、生物教授プランをめぐるのは、次の8段階に区分することができる。すなわち、①第1段階：敗戦後から1949年のDDR建国まで、②第2段階：50年代前半、③第3段階：50年代半ばの社会主義学校をめぐる論争期、④第4段階：1959年教授プランまで、⑤第5段階：1968年教授プランまで、⑥第6段階：68年生物教授プランから80年代前半まで、⑦第7段階：80年代前半の生物教授プランをめぐる論争から1987年生物教授プラン案までの時期、⑧第8段階：1989年生物教授プランから1990年の「生物教授プランに関する助言」（後述）まで、の8段階である。

エピローグ

東西ドイツ再統一（1990年10月3日）を前に、DDRの人民教育省に代わる新たな教育・科学省はよりよい教育改革を目指して、1990年3月に、『5～10学年用生物教授プランおよび7～10学年用化学教授プランとの取り組みに関する助言』（Ministerium für Bildung und Wissenschaft 1990）を出す。その「まえがき」では、DDRの学校をめぐる現在の状況が次のように描き出されている（3）。

DDRの学校はその革新の大きな挑戦の前に立っている。これは、グローバルな生存にかかわる人類の諸問題（Menschheitsfragen）、両ドイツ国家の統一の過程と共同のヨーロッパ議会の形成とに結びついたわが国における深刻な社会的変化によって条件づけられている。これはしかしまた、大いに間違ったイデオロギー的・ドグマ的な教育政策のためにDDRの学校の

状況から生じている一つの必要でもある。現在、民主的で柔軟な学校のための新たなそしてよりよい解決を見出し、教育と学校を根本的に改革するために、広範な、公共の民主的な議論の中で、教育制度全体の機能、目標、内容そして何よりもその作用が検討されている。

かかる改革はだが時間を要する。それでもすでに今、所与の教育構想と学校の構造の枠内で、前を見て、学校およびとくに授業を重荷と強制から解放し、授業の限定条件を変え、こうして学校教育のより高い質を目指すことが肝要である。

この必要性から3つの「授業に対する緊急な要求」が出されている。すなわち、①「他の世界観、文化圏と生活様式に対する寛容、政治的複数主義の受容、ならびに世界観とリアルな社会的過程との批判的・建設的な分析と評価、こうしたことに対する能力を作り上げ、これを欲求の発展と結びつけて、この過程の形成に参加すること」、②「人間主義的、民主的で、社会的、精神的・文化のおよび科学・技術的な人類の進歩に義務を負うすべての価値との同一化を、追求に値するものとして、人類の維持のために生きるに必要なものとして根拠づけること」、③「個人的な行動余地を理解できるようにし、それを実現するのを学ぶこと」(ebd.)である。

そして、こうした要求をかなえるために、現在と将来の教授プランはもはや「ドグマ」ではなく、「枠組という性格(Rahmencharakter)」のものに変えるとしている。すなわち、それは「授業時間での比較的高い拘束・義務の程度があっても、内容、その順序および取り扱いの標準時間に関して、意識的に大きな自由裁量を与える」(3)ものという性格をもつ。こうして新たな教授プランは、次のように特徴づけられている。すなわち、①「授業はつねに教員と生徒の協働によってようやく創られる」こと、②「授業は目標に向けた活動と目標志向性を必要とする」が、それは、「生徒の関心、欲求、期待に、彼らのすでにある知識と能力を結び付けて、目標発見ならびに内容・方法選択の過程へと組み入れること」を含むこと、③授業の中心にあるのは、「人格の自由な展開」であること、④「教授プランの時間の指示は、基準値である」こと、⑤教員と生徒の活動ならびに具体的な授業づくりは、教授プラン(ないしは授業補助や教科書)によって「あらかじめプログラム化する」ことはできないこと(4)。

こうした「枠組プラン」として、「5～10学年生物の教授プランへの取り組みへの助言」が提案されている(著者はPews-Hockeである)。その「序言(Einleitende Bemerkungen)」では、今日の重要な「問題領域」として、①「人間と環境」、②「健康な生活態度と社会的関係」、③「生物科学と社会」が挙げられ、それぞれについて内容上の重点項目が指摘されている。セクシュアリティに関する②だけを取り上げれば、そこでは以下の項目が挙げられている(7-8)。

- ・人間の健康と業績達成能力の維持に対する個人的責任を根拠づけること
- ・健康な生活態度への取り組み(……)を、根拠を持って周知させること
- ・セクシュアリティ(ヘテロセクシュアリティとホモセクシュアリティ、家族計画、を含めて)、パートナーシップ、結婚、家族、AIDSの問題について(社会科と調整して)議論すること

- ・社会的関係の意義，例えば，個性への権利，相互に対する態度（Verhalten），老人，障害者，異なる人種と国民に対する態度を（社会科と調整して）議論すること

そして，この重点項目にもとづいて，8学年では次のことが提案されている（11）．すなわち，①すべての教材領域において，人間は自分の環境の能動的な形成者，維持者及び利用者であるが，しかしまた環境は人間の健康と業績達成能力とに反作用することをもっとはっきりと強調すること，②すべての教材領域を取り扱う際に，生徒に自分の身体の健康と業績達成能力の維持に対する個人的責任をもっと意識化させること，③生徒に，生命を脅かす免疫不全症 AIDS に関する知識を伝えること，④より大きな位置価値を占めるのは，「セクシュアリティ（ヘテロセクシュアリティとホモセクシュアリティ，家族計画含めて），パートナーシップ，結婚，家族および社会に関する問題」であること，⑤生徒に，例えば，友だち関係，男子と女子間の関係，障害者，老人，外国人に対する関係など，彼ら自身の発達を他の人間に対する関係の発達としても意識化させること，⑥具体例で，例えば臓器移植，ペースメーカー，「人工」肝臓などで，生徒に，人間生物の健康と業績達成能力の維持に対しての生物学と医学の現代的認識の利用に関して情報を与えること．

しかし，こうした DDR の教育・科学省の自己改革の努力も，DDR の BRD への一方的な併合のなかにむなしく消え去ってしまった．

* 著者からの引用は，（1974: 5）のように，著作刊行年，ページ数の順に（ ）内に記す．

註

- 1 なお，生物教授プランには○番号を付してあるが，それは，池谷（2014）の表1にある番号を指している．
- 2 60年代は，婚前性交の抑制的な承認と結びついて，身体的成熟と区別して社会的成熟の必要性が強調されている（例えば，Bittighöfer 1966）．なお池谷（2012a）も参照．
- 3 この問題点については，さしあたり池谷（2012b）参照．
- 4 DDR におけるホモセクシュアリティの受容の議論については，池谷（2013b）参照．
- 5 同様の主張はすでに Bach（1974）でも行なわれている．そこではこう述べられている．「妊娠中絶の解禁は女性の同権の実現の表現である．女性自身が今から，この時点で子どもを産もうかどうかを決定する．これによって女性は自分，自分の家族およびわれわれの社会に対する高い責任を引き受ける」．しかし，この責任意識は発展させられねばならない．すなわち，「わが成長期にある者，つまり女子と男子と，これに関する倫理的な会話がなされねばならない．その際われわれは明確にはっきりと，どの妊娠中絶も手術であることを強調すべきであろう．この手術が，法律が規定している通りに，病院で経験のある専門医によってなされるとしても，一定のリスクはある．手術の繰り返しはリスクを高める」（161f.）．
- 6 この論文は教育雑誌で初めて，ホモセクシュアリティを肯定的に取り上げた論文である．その詳細については，池谷（2013a）参照．
- 7 14歳の男女（8学年の生徒）を大人社会に迎え入れる儀式で，8学年の終わりに行われた．SED は1954年にこの儀式の導入を決定し，1955年から始められた．ここで彼らは社会主義国家に対する忠誠を誓った．

引用・参考文献

- Aresin, Lykke/Müller-Hegemann, Annelies (Hrsg.) 1982a (5., durchgesehene Auflage): Jugendlexikon Jugend zu zweit. VEB Biographisches Institut Leipzig.
- Autorenkollektiv 1973: Allgemeinbildung Lehrplanwerk Unterricht. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Bach, Kurt R. 1974: Geschlechterziehung in der sozialistischen Oberschule. Entwicklung und Realisierung eines Programms zur systematischen Geschlechterziehung in den Klassen 1 bis 10 der Oberschule der DDR – ein Beitrag zur Vorbereitung der Heranwachsenden auf Ehe und Familie. VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften Berlin.
- Bach, Kurt R. 1975: Zur Behandlung der Empfängnis-prophylaxe als Bestandteil verantwortungsbewußter Familienplanung im Biologieunterricht der Klassen 8, 10 und 12. *Biologie in der Schule*, 24 (5), S. 180-184.
- Bach, Kurt R. 1978: Zu einigen Problemen bei der Sexualerziehung in der Schule. In: Szewczyk, Hans/Burghardt, Horst (Hrsg.): Sexualität. Fakten, Normen, gesellschaftliche Verantwortung. VEB Verlag Volk und Gesundheit Berlin, 1978, S. 97-99.
- Bach, Kurt R. 1985: Homosexualität- Gesellschaft- Sexualerziehung. *Biologie in der Schule*, 34 (12), S. 486-492.
- Bach, Kurt R. 1989: Zu einigen aktuellen Fragen der Sexualerziehung in der DDR. In: Schmigalla, H. (Hrg.) 1989 : Psychosoziale Aspekte der Homosexualität II. Workshop der Sektion Andrologie der Gesellschaft für Dermatologie der DDR und der Sektion Ehe und Familie der Gesellschaft für Sozialhygiene der DDR am 23. April 1988. Friedrich-Schiller-Universität Jena, S. 16-25.
- Baer, Heinz-Werner 1962: Geschlechtsorgane und ontogenetische Entwicklung des Menschen. In: Deutsches Pädagogisches Zentralinstitut Sektion Unterrichtsmethodik und Lehrpläne 1962: Biologieunterricht. Methodisches Handbuch für den Lehrer. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin. S. 321-324.
- Baer, Heinz-Werner 1966: Die Geschlechterziehung im Biologieunterricht. *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock. Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, 15. Jrg, Heft 7/8, S. 741-746.
- Baer, Heinz-Werner (Hrsg.) 1970: Biologie. Lehrbuch für Klasse 8. Anatomie, Physiologie und Hygiene des Menschen. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Baer, Heinz-Werner (Hrsg.) 1982: Biologie. Anatomie, Physiologie und Hygiene des Menschen. Lehrbuch für Klasse 8., 1. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Baer, Heinz-Werner (Hrsg.) 1989: Biologie. Anatomie, Physiologie und Hygiene des Menschen. Lehrbuch für Klasse 8., 6. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Bittighöfer, Bernd 1966: Probleme der sozialistischen Geschlechtsmoral und der Erziehung der jungen Generation zu sittlich wertvoller Partnerschaft. *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, 1966, S. 721-731.
- Böhme, Ortrun 1986: „Für und Wider“, *Biologie in der Schule*, 35 (4), S. 123-126.
- Borrmann, Rolf 1987: Sexualerziehung nicht nur, aber auch Anliegen des Biologieunterrichts. *Biologie in der Schule*, 36 (10), S. 358-361.
- Gesetz über das einheitliche sozialistische Bildungssystem vom 25. Februar 1965: MONUMENTA PAEDAGOGICA 1969: S. 569-604
- Grassel, Heinz 1962: Psychologische Probleme der Geschlechterziehung. *Pädagogik*, 2. Beiheft, S. 8-24.
- Grassel, Heinz/Bach, Kurt R. 1974: Zur Vorbereitung unserer Jugend auf Ehe und Familie. *Einheit*,

- 5-74, S. 582-591.
- Horn, Frank/Kaiser, Günter 1986: Unser Beitrag zum XI. Parteitag der SED. Diskussion: Zur Weiterentwicklung des Biologieunterrichts in den Klassen 5 bis 10. *Biologie in der Schule*, 35 (2/3), S. 49-61.
- Laass, Wolfgang 1988: Meine Vorstellungen zum Beitrag des Biologieunterrichts zur Gesundheitserziehung. *Biologie in der Schule*, Heft 10, S. 360-361.
- Loschan, Rudolf 1966: Zur Präzisierung der Biologielehrpläne. *Biologie in der Schule*, Heft 2, S. 49-53.
- Mecklinger, L. 1984: Der Beitrag der Gesundheitserziehung zur weiteren Gestaltung der sozialistischen Lebensweise. In: Nationale Komitee für Gesundheitserziehung der Deutschen Demokratischen Republik (Hrsg.) 1984: Sozialistische Lebensweise und Gesundheit – Konferenzbericht. Dresden, S. 9-32.
- Mecklinger, L. 1989: Die weitere Entwicklung der gesundheitsfördernden Lebensweise der jungen Generation – eine gesamtgesellschaftliche Aufgabe. In: Nationale Komitee für Gesundheitserziehung der Deutschen Demokratischen Republik (Hrsg.) 1989: Jugend und Gesundheit – Konferenzbericht. Dresden, S. 9-23.
- Ministerium für Volksbildung 1965: Anweisung zur Gültigkeit von Lehrplänen in den zehnklassigen allgemeinbildenden polytechnischen Oberschulen ab 1. September 1965. *Verfügungen und Mitteilungen des Ministerium für Volksbildung und des Bereiches Bildungswesen der Staatlichen Plankommission*, Nr. 8, S. 107-115.
- Ministerium für Volksbildung der DDR (Hrsg.) 1966: Lehrplan für das Fach Biologie Klassen 7 bis 10. Nachdruck des Lehrplan von 1959 unter Berücksichtigung aller seit 1959 durchgeführten verbindlichen Veränderungen. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Ministerium für Volksbildung der DDR (Hrsg.) 1968: Präzisierte Lehrplan für Biologie Klasse 8. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Ministerium für Volksbildung der DDR (Hrsg.) 1982: Lehrplan Biologie Klassen 7 bis 10. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Ministerium für Volksbildung (Hrsg.) 1989: Lehrplan der zehnklassigen allgemeinbildenden polytechnischen Oberschule Biologie Klasse 5 bis 10. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- MONUMENTA PAEDAGOGICA 1969, Bd. VII/2 Dokumente zur Geschichte des Schulwesens in der Deutschen Demokratischen Republik, Teil 2: 1956-1967/68, 2. Halbband, Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Neubauer, Klaus 1988 : Weiterentwicklung des Biologielehrplan Klasse 8. *Biologie in der Schule*, 37 (4), S. 142-144.
- Pews-Hocke, Christa 1987: Standpunkte und ihre Umsetzung in den neuen Lehrplänen für die Klassen 5 bis 10. *Biologie in der Schule*, 36, (9), S. 326-332.
- Pews-Hocke, Christa 1988: Konstruktiver Dialog für die Weiterentwicklung des Lehrplans Biologie Klasse 8. *Biologie in der Schule*, Heft 10, S. 353-360.
- Sehmrau, Wolfgang 1986: Die Einführung neuer Inhalte erfordert eine konsequentere Konzentration auf das Wesentliche! *Biologie in der Schule* 35 (6), S. 215-221.
- Tille, Rolf 1993a: Lehrpläne und Biologieunterricht in der DDR: Erinnerungen und Erfahrungen (5), *Biologie in der Schule*, 42 (7/8), S. 268-270.
- Tille, Rolf 1993b: Lehrpläne und Biologieunterricht in der DDR: Erinnerungen und Erfahrungen (6), *Biologie in der Schule*, 42 (11), S. 385-388.
- Wernecke, Alexander 1966: Zur Einführung des präzisierten Lehrplan für den Biologieunterricht. *Biologie in der Schule*, Heft 1, S. 97-106.

- 池谷壽夫 2009:「DDRにおける妊娠中絶の歴史的展開」,『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第120号, 2009年12月, pp. 73-105.
- 池谷壽夫 2011a:「1960年代におけるDDRの学校・青少年・家族政策と性教育」,『日本福祉大学社会福祉論集』第124号, 2011年3月, pp. 1-26.
- 池谷壽夫 2011b:「科学的知識普及協会研究報告会議と性教育研究会議—1960年代DDRにおける性教育の動向(その1)—」,『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第124号, pp. 57-88.
- 池谷壽夫 2011c:「第3回性教育研究会議と共同研究グループ「性教育学」の設立—1960年代DDRにおける性教育の動向(その2)—」,『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第124号, pp. 57-96.
- 池谷壽夫 2011d:「性教育国際シンポジウムと60年代性教育の成果—1960年代DDRにおける性教育の動向(その3)—」,『日本福祉大学社会福祉論集』第125号, pp. 1-20.
- 池谷壽夫 2012a:「性教育の必要性和その目標—1960年代DDRにおける性教育の到達点と問題点(その1)」,『日本福祉大学子ども発達学論集』第4号, 2012年1月, pp. 1-26.
- 池谷壽夫 2012b:「社会主義人格の全面的発達, 女性・家族政策と性教育—70年代DDRにおける性教育(その1)—」,『日本福祉大学 社会福祉論集』第127号, 2012年9月, pp. 1-44.
- 池谷壽夫 2012c:「子ども・青少年の性的発達段階とそれに応じた性教育プログラムの開発—1960年代DDRにおける性教育の到達点と問題点(その3)」,『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』, 第126号, 2012年9月, pp. 39-82.
- 池谷壽夫 2013a:「性的健康とパートナーシップのための性教育—80年代DDRにおける性教育の特徴と問題点」,『日本福祉大学 社会福祉論集』第129号, 2013年9月, pp. 59-98.
- 池谷壽夫 2013b:「80年代におけるDDRのホモセクシュアル解放をめぐる取り組みとその問題点」,『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第128号, 2013年9月, pp. 39-75.
- 池谷壽夫 2014:「ソ連占領期から1959年までのDDRにおける生物教授プランの変遷と性教育」,『日本福祉大学 社会福祉論集』第131号, 2014年9月, pp. 87-125.

付記: 本稿は, 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C「日独性教育比較に基づいた, 性教育における男子支援に関する研究」, 課題番号24531031)にもとづく研究成果の一部である。